

天翔け地這う

第三卷 オセロ作戦 1

生野以久男

第一章

1

「おい、変わったことはないか」

少々太めのがつちりした体格の男がモニターをチェックしている若い男に背後から近付く。湖畔の一軒家作戦に従事した黒装束チームのチーフ山城だ。

「はい。いまのところ変化ありません。誰も来ません」

モニターには男女の姿があった。食事しているのか、テーブルにはご飯茶碗とみそ汁のお椀のほかに、料理を盛った皿や小鉢がいくつも並び、ふたりはせつせと口を動かしている。

「発信機も異常ないな」

「はい。異常ありません」

「それにしてもよく食うな、ふたりとも……」

「はあ……」

「体内にチップ（発信用チップ）を埋め込まれていると、腹が空くのかな」

「……………」

山城は若い男の背後に立ったまま、モニターを覗く。この男も日本地区代表に劣らず、野心を秘めた鋭い目付きをしている。

「黒の集団」が湖畔に陣を構え、対岸の一軒家にいる木実子と森野を監視するようになって、彼はふたりに対して任務遂行を超える関心を示さなかった。かといって無視しているわけでもなかった。木実子に関する情報

をたびたび要求されても、上から命じられたいつもの仕事と認識していたにすぎない。

最初は、地区代表の個人的な関心事ぐらいにしか思わなかった。

だがあるときから、彼は急にふたりに関心を持ちだす。なぜか、地区代表が異常なまでに、ふたりの詳しい動向を知りたがるのだ。そして女に関する情報を執拗なまでに要求してきた。

それは傍から見ても異常だった。なにが地区代表にそのような行動を取らせているのか。彼は知らずのうちに、女に興味を持つようになっていった。

一軒家のふたりが「天の組織」と関係があるらしいことは知らされていたが、地区代表の関心は度を超えて異常だった。女の行動について毎日、ときには日に二度、三度と詳細な情報を要求してくるのだ。

彼は次第に地区代表の行動に興味をそそられ、女へのめり込んでいく。

野心家の地区代表の執拗なまでの要求には、きつとなにかが隠されているはずだ。それも極めて重要な秘密にちがいない。それは一体なにか。彼はあれこれ考えるが、どんな秘密が隠されているのか、これはというものはないか思い付かなかった。

突然、一軒家にふたりを残したまま、作戦が中止になった。だが燃え上がった彼の好奇心の炎は収まらなかった。

一軒家のふたりに秘密を解く鍵があると睨んだ彼は、ひとつの計画を思い付く。

彼は上司に気付かれないように、一軒家にふたりとそっくりの人形を残し、ふたりを密かに拉致することにしたのだ。そしてふたりを常時遠隔監視するために、体内に超小型の発信用チップを埋め込んだのだ。

彼にとって幸いなことに、その直後、湖近辺に発生した竜巻が湖畔の一軒家を襲ったのだ。

一軒家は空中に舞い上げられ、跡形も無くなった。地元消防署のレスキュー隊員による捜索にのめらかかわらず、住んでいたふたりの遺体は見つからなかった。その後なんの消息もなく、ふたりは竜巻の犠牲になったことになってしまった。

一軒家作戦から戻ると、彼は何食わぬ顔をして、上司に、一軒家が竜巻の直撃を受け、住人もろとも吹飛ばされてしまったと報告した。

それ以来、彼は自室の片隅で密かにふたりの監視をつづけていた。何日経ってもふたりの周りにはなんの変化も現れなかった。それでも彼は監視をつづけた。

彼は湖畔の一軒家で目にした不思議な出来事を忘れることができなかつたのだ。

暗闇の迫る晩秋の夕暮れ時のことだった。

突然、天空から淡い光の糸のような光線がするする伸びて一軒家のなかへ入って消えたのだ。彼は一隊を引き連れ、すぐさま一軒家へ向かった。

家中をくまなく一斉に調査したがなにも発見することができなかった。あとでそのときのビデオを再生すると、糸のような細い光の帯を辿って下りてくるひとりの若い女の輪郭が淡く浮かんだ。

あのとき、一軒家を徹底的に調べ上げたのに、若い女の姿はどこにもなかった。それどころか、髪の毛一本、ゴミのひとかけらさえ見つからなかった。

ところが、その数日後、天空へ伸びる光の帯をひとりの女が昇っていたのだ。

ほんの一瞬の出来事だった。目を凝らしても決して気付くことがない一瞬の出来事だった。超高速撮影のビデオを再生してはじめて捉えることができたのだ。

女はどこに隠れていたのだろうか。

彼は誰にも話さず、もう一度一軒家を徹底的に調べた。だがなにも見つからない。まるで、狐に騙されたようだった。

彼はこの不思議な出来事を上司にも報告せず、ひとり胸に仕舞い込んでしまった。自分でも半信半疑だったし、またこんな話をして、誰も本気にしないだろうと思っただけだった。

彼は何度もビデオをチェックする。そしてこのふたりがなにかを知っているにちがいないと思っただけ。

自白強要剤を用い、ふたりを徹底的に調べたが、なにも出てこなかった。ふたりの無意識レベルの記憶のなかにも若い女の記憶がなかった。それで彼はふたりに自由に振る舞わせる作戦に出たのだ。

2

「『黒の集団』は着々と作戦を進めているようだ」

アムンがぼつりと言い、目の前に立っているハクリに目を移す。

「……………」

ハクリは口を噤んだまま、じつとアムンを見つめる。深いしわが刻まれた顔は憂慮に満ちていた。

「最近成年男子の精子の数が極端に減ってきている。卵子の劣化も急速に

「進んでいるのではないか」

「それでは今後、不妊率が増加して出生率が低下することになるのですか。そして、世界人口が減少していくことになるのですか」

「数の減少に加え、質の劣化もあるだろう。このまま、人口の減少と質の低下が近づけば、地球人類の将来にとって大問題だ」

人間の男子は一〇歳を超すと、一日約五〇〇〇万個から数億個の精子をつくりつづける。それが最近急速にその数を減らしてきているという。WHOが不妊の目安にしている二〇〇〇万個を切るものも出てきているのだ。

一方、卵子の数は、胎児の時には卵巣に卵母細胞が六〇〇万個から七〇〇万個があるが、出生時になると、卵子は一〇〇万個から二〇〇万個で、初潮の時には七〇万個前後となる。二〇歳ごろには一〇万個、四〇歳ごろには一万個となってしまふ。一生のうち、受精できる卵子は四〇〇個ぐらいだが、卵子の劣化がかなり目に付くらしい。

「『黒の集団』の世界人口減少作戦がはじまっているのでしょうか……」

「そうとしか考えられない。ある種の合成化学物質が生殖に悪影響があると疑われても、彼らは生産を止めず、かえって、それらの合成化学物質を大量に売り捌いている。それらの影響で地球人の精子数が減少しているらしい。ことに日本がひどい。それに、この種の合成化学物質に対する行政の規制の動きにも、彼らはその手この手を使って執拗に抵抗してきている。それはなぜか。その意図はなにか……」

彼は「黒の集団」の戦略戦術をあれこれ考える。彼らの意図を正確に掴まなければ、どんな対応策も的外れになってしまうのだ。

物質を構成する化学物質には、もともと自然に存在するもののほかに、人為的に合成されたものがある。これが合成化学物質である。厳密にいえ

ば、これとは異なるが、これに類するものに、非意図的に生成される化学物質がある。たとえば、ダイオキシン類やトリハロメタンだ。非意図的に生成されるとはいえ、生成過程でなんらかの人工的要素が加わってれば、この種の化学物質も合成化学物質に準じて考えてよい。

とにかく、日本など先進諸国ではさまざまな合成化学物質が生活環境に入り込み、合成化学物質なしに生活できないほどになっている。たとえば、家の中には、毎日使う各種の合成洗剤から化粧品、香水、シャンプー、リンス、ヘアスプレー、歯磨き粉、口腔洗浄剤、各種医薬品、各種健康食品、芳香剤、消臭剤、防虫剤、防かび剤、床用ワックス、漂白剤、殺虫剤、ゴキブリ駆除剤など、これらはさまざまな合成化学物質を寄せ集めてつくられているのだ。それに食べものに加えられる各種添加物は合成化学物質そのものだ。

また、居住用住宅やさまざまな建造物には、合成化学物質を存分に使用された合板や壁紙など各種建材が使用されているし、シロアリ駆除剤、ガーデニング用殺虫剤や除草剤なども欠かせない。

今日、世界中の人びとには合成化学物質が欠かせず、日常生活は無数の合成化学物質に塗られて、包囲されてしまっているのだ。

「地球人はもはや合成化学物質なしでは生活できない……」

「そうだ。そこが彼らの付け目だ。今日、便利で豊かな生活を維持するために使用されている合成化学物質は、一説によると、五万種から一〇万種ともいわれている。だが、現在、地球上では、多分それ以上の化学物質が工業的に大量に生産され、大量に消費され、大量に廃棄されているだろう」

「地球環境はこれらによってすっかり汚染され尽くしてしまっている。そしてそのなかには精子を減少させるようなおかしなものが含まれている……」

…」

「いや、『黒』は故意におかしなものを加えていたのだろう。さもなくば……」

彼の脳裏に作戦を着々と遂行している「黒の集団」が浮かんだ。と同時に、「黒」を統率する議長の高笑いが響く。

確かに、これまでの「黒の集団」の行動からみれば、目的を実現するために手段を選ぶことはないのだ。あえて毒性のある合成化学物質でも大量に生産し、大量に販売して大量消費を仕向けることも厭わないだろう。彼らには行政の規制など、屁の河童なのだ。

だが彼には分からないことがあった。ある種の合成化学物質が体内でホルモンに似た働きをして内分泌を攪乱し、生殖機能や性決定などに悪影響をおよぼす懸念が指摘されていたときのことだ。

彼らには行政の規制など眼中にないはずなのに、行政が合成化学物質の有害性を確認評価するための試験をしようとしたとき、なぜか、彼らが猛烈に抵抗し、執拗に妨害したのだ。行政の単なる有害性確認評価試験の段階で、何故にそれまでしたのか。それまでして、なぜ前もって、規制の動きを封じようとしたのか。

そのとき、彼ら「黒の集団」は動きの鈍い業界団体をせっつき、あらゆる手を弄して、行政の動きを封じてしまったのだ。なぜ日本の行政に対して「黒の集団」がそこまでするのか、彼にはなかなか理解することができなかつた。

もしかしたら、彼らが密かに実行する世界人口減少作戦が暴露されることをおそれたのかもしれない。だが彼らの傘下にあるグローバル企業を動員すれば、目くらましに、矢継ぎ早に、多種多様の合成化学物質を世に出

すことなど、朝飯前なのだ。疑わしいとされた合成化学物質に代わる新たな合成化学物質をつぎつぎに開発し、大量生産、大量販売することはいとも優しいことだった。

「もしかしたら、彼らはすでに、日本乗っ取り作戦を開始しているのかもわからない」

彼は自分の呟きを聞いて、はっとする。それは無意識のうちに、ふいに口から漏れてた呟きだった。

「そうか。そうだったのか……」

彼はようやく、彼らが自らの世界戦略を遂行するために、日本の官僚と親しく接触する機会をつくるために打った芝居だったことに気付いたのだ。

たとえ生殖毒性がある合成化学物質とはいえ、新たに規制の対象とするにはその根拠となる法律が必要だ。法律がなければ、規制することはできない。政令や省令で追加的に行なうことができる場合でも、それなりの根拠が要請される。

日本では、今日、法律案（法案）の大半は官僚によってつくられている。これが大臣、内閣、そして国会が承認（議決）すれば、法律となるが、これらの政治家（大臣、内閣、国会議員たち）の承認をうるためには、実行したい政策の必要性を納得させるにたるそれなりの情報や証明資料が必要なのだ。

そこで、官僚がこれらの資料を作成するために利用するのが、審議会、研究会、検討会といった専門家で構成する委員会組織（会議体）だ。専門家で構成するといっても、明らかな反対意見の持ち主は敬遠し、批判的な専門家もできるだけ排除する。そして自分に都合のいい委員を選ぶのだ。もし人選後に委員の言動に不都合が見つかれば、即座に入れ替える。委員

会の席上、事務局の意に反して、反対意見や修正意見を言おうものなら、次回以降は「お呼び」でないことも多い。

このような委員会で作成された報告書の都合のいいところを取り出して、これらを見繕って説明資料をつくり、法案に仕上げる。これができれば、つぎは、政治家の説得工作へ移ることになる。

これらの過程で、直接、官僚や政治家を対象に、さまざまな利害関係者による干渉、妨害、反対工作等がなされる。これらの各段階で、多くの修正を加えられたり、骨抜きにされたりして、当初の法案とはまるで別物となったり、あるいは没となったりする法案も多い。

それゆえ、もし、「黒の集団」側が単に規制に反対するなら、この機会を掴まえば十分なのに、そのときはその前段階の説得資料作成段階に強引に割り込んできたのだ。そして、猛烈な妨害行為を敢行したのだった。

「もし、日本乗っ取り作戦が始まっているとすれば、これにどのように対処すればいいのでしょうか」

ハクリは返事を待つように、じつとアムンを見ている。

「ハクリ、ヨウとミサを呼んできてくれ。ふたりの出番だ」

アムンはハクリの後ろ姿を見送りながら、頭の中でひとつの作戦を描いていた。

3

「最近、日本でふたたび、『内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）』が問題化しているようだが……」

突然、地区代表の執務室に議長の声が響く。壁一面のスクリーンに黒装束に黒の尖り帽子を被った議長が現れた。

「はあ……」

日本地区代表の精悍な感じの顔に、一瞬陰りが走る。代表は議長の声にいつもと違った苛々した荒々しい響きがあることを感じた。議長はつづけて「一体どうしたことだ」と言いたかったにちがいない。

一〇年前にも「内分泌攪乱化学物質」がマスコミに取り上げられて大問題化したことがあった。そのときは事前に手を打ち、合成化学物質に対する行政の動きをなんとか食い止めることができた。それが再燃したことに、議長が不満に感じているのか。

議長はあのととき、行政の動きが収まった機に乗じ、「内分泌攪乱化学物質」類似の合成化学物質をつぎつぎと乱開発する作戦を思い付き、一挙に「バラマキ作戦」に打って出たのだ。

日本地区もそれを受け、多種多様の合成化学物質を大量生産し、これらを用いて各種の新製品を開発して売り込んだのだ。そしてあらゆる手段を弄して大量生産大量消費大量廃棄を促してきたのだった。

日本地区代表にとって、今回の「内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）」問題化の再燃は当然予想されたことにすぎなかった。まさかそのことを議長が予想しないことはあるまい。それだけに、議長の不満が理解できないのだ。

「あのとときに徹底的にやっていたのだから。いまごろになって蒸し返されては、折角の作戦も台無しになってしまう。そうだろう……」

「……………」

「いいかね。この作戦はまだ半ばだ。ここで規制強化に出られれば、これ

までの作戦も水泡に帰すのだ」

「分かりました。今度こそ、行政の動きを粉砕します」

「そうできればいいが、日本乗っ取り作戦はまだ早いぞ。早まるな。指示するまで待つように」

議長はびしやりと言うと、姿を消した。

冷や汗が背筋を流れ落ちていく。日本地区代表は棒立ちのまま、しばらくスクリーンを見ていた。

4

「なにかご用でしょうか」

ミサにつづいて、ヨウが執務机のまえに立つ。大きな机の向こうに、ふたりを見つめるアムンの深い透明な目があつた。ハクリが机の横に立ち、若いふたりとアムンの横顔に交互に目を走らせる。

「一軒家の住人……」

「秋野木実子と森野祐輔のことですか」

問いの意図を推し量ろうと、未佐はじつとアムンの目を覗く。

「そう。秋野木実子さんはヨウの……」

「はい。わたしの母です……。でも、現在……」

すかさず、耀は応える。

「うん……」

アムンは軽く頷き、目を細めてじつと耀を見た。

「ほうぼうを当たっているとありますが、まだふたりの行方が分かりませ

ん……」

ハクリが横から口を入れる。

「『黒』の連中がふたたび蠢動しているようだ。ふたりを早く探し出して、準備をはじめないと後れを取るようになる」

「……………」

ハクリは口を閉じたまま、大きく頷く。

「とにかく、連中は以前のように徹底的して規制の動きを潰したと思っていたのに、ふたたびK省が『内分泌攪乱化学物質』のチェックをはじめようと動き出した。これで慌てふためいているようだ。今度という今度とは、まえに倍加して対行政作戦を勢い込んで考えているにちがいない。激しい攻防が予想されるが、われわれもまえのように傍観しているわけにはいかない。これを放置しておけば、世界が『黒』の恣しいままに改造されてしまうからだ」

一九九〇年代にワニや魚類のメス化傾向が報告され、「内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）」の存在が広く知れ渡った。マスコミにも大々的に取り上げられ、大きな社会問題となった。行政当局も無視できず、合成化学物質の評価のための生物試験に取り組むことになった。

そしてとりあえず「優先的に検討すべき物質」として六十七物質をリストアップし、試験に入る。これに対して、化学業界など関係業界が風評被害を招くとして猛烈に反発するとともに、合成化学物質原因説の否定に躍起となったのだ。

試験方法も確立していなかったこともあって、そのときは約半数の三十六物質を試験しただけで終わった。そして結局、六十七物質にのぼる嫌疑のかけられた合成化学物質のリストは撤回されてしまったのだった。

「疑わしい合成化学物質に対する新たな動きがまたはじまって、これに対し、やつらは今回、どんな妨害をするつもりでいるのでしょうか。われわれはどのような方法でやつらに対抗すればいいのでしょうか」

ハクリは目を大きくして、アムンに問いかける。アムンは目を閉じたまま、動こうとしない。未佐と耀もアムンをじつと見守る。

「多分、連中は前回接触した官僚にふたたび接触し、将来に備え、さらに濃密な関係を作り出そうとするだろう。こうなってしまうのは両者の関係を断ち切ることはますます難しくなる。日本官僚はなぜか産業界に極めて弱いからだ。だから、そのまえに行動を起こさなければならぬ……」

しばらくして、アムンはかつと目を見開くと、おもむろに口を開いた。そしてつづけて、こんなことを加える。

日本の現行官僚組織には理念も倫理観もなく、ぶよぶよにふやけ切っている。組織自体に全体性や統一性が欠落しており、組織全体として総合的な施策や行動ができないどころか、組織内に矛盾や衝突対立を内包している。

日本の現行官僚組織は細分化され、いわば、国のなかに国がいくつもあのような状況なのだ。そして組織の一部局に過ぎない各省庁が組織のなかで独立王国を形成し、自省の管轄に属する事案には他省の容喙を許さず、自省の利益（省益）第一の行動を優先させている。

こうしたことが組織構成員の一家意識を増長させ、OBを含めた省構成員の互助会的システムが不動のものとして確立されていくのだ。それを支えているのが利権構造だ。直接間接利権につながるものに対しては弱く、それ以外のものにはあくまで冷淡で無関心を決め込むことが多い。こうした関連組織はおろか、関係業界や関係企業との密接な繋がりを維持確保す

る。そしてまるで「賄賂の後払い」と揶揄されているのに、これらへの退職官僚たちの天下りが平然と行われているのだ。

官僚の行動原理は無誤謬性、前例尊重、それに事大主義だ。その結果といえ、間違いを認めることがないので、自ら責任をとることがないのだ。前例のないことは実行されることがないので、自ら改革することは到底期待できない。それに強いものに対しては従順でも、弱いものには見向きもしないことが多い。

明治初期の新政府における国策としての「富国強兵」の名残りか、それともその後遺症なのか、現在でも行政（官僚）はなぜか産業界寄りだ。規制に係わる施策や法案づくりできえ、被規制側業界の意見や要望を聞くことを欠かさない。業界が強く反対する場合には適当なところで折り合いを付け、妥協する。こうして業界に恩を売り、一族郎党のために退職後の天下り先を確保する。こうして国民の生活や国家のことよりも「一家」の省益が優先されることになる。

「これらは日本官僚組織の弱点であり、また官僚個々の弱みでもある。『黒の集団』はここを徹底的に突くのだ。こうして官僚を自軍に誘い込み、自分の言いなりに操縦する。これが彼らの戦略であり、作戦なのだ」

アムンは宙を見、じつと考え込む。
「これに対して、われわれは……」

ハクリはアムンを見て、途中で言葉を呑む。

「やはり、彼らはここ日本で人口減少作戦のための社会実験と世界帝国化のための拠点づくりの両者を同時に進めようとしていると思う。官僚と官僚組織がこのありさまでは、日本国の基盤的皆は侵食されて崩壊するの時間の問題といつてよい。遠からず、日本は日本でなくなる。これを防

ぐには日本国民自ら立つほかない。われわれは側面から協力できても、日本国民自らがその気にならなければどうすることもできないのだ」

アムンは耀と未佐に目を向け、じつと見つめる。

「アムン、ぼくを地上に戻してください。『黒の集団』と闘うために……」

「わたしも……」

耀と未佐が叫ぶ。

「それはムリだよ」

ハクリが穏やかな口調で、口を挟む。

「どうして……」

「ヨウは何歳だった？ 地上に戻ることができたとしても、また幼児に戻るだけだよ。それに、一度戻れば、二度とここに帰ってくる事ができなくなるんだよ。それでもいいのかな」

現実世界に戻ることは、「天の組織」のメンバーでなくなることでもあった。折角腕を磨いたのに「術」が使えなくなるばかりでなく、「術」のマスターで対応に変化した体付きも以前の状態に戻ってしまうのだ。

「そんなこと……」

「ヨウ、『黒の集団』と闘う方法はいろいろある。だが現実世界との接触には、やはり、現実世界にいるヨウのお母さんたちと協働するほかないんじゃないかな。このことについて考えてみてはどうか。どのような方法でやるのがいいか、ハクリにコーチしてもらえばいい」

アムンは暗示をかけるかのように、底なしに澄んだ目を耀と未佐に向け、じつと見据えた。ハクリは黙って、ふたりに見守っていた。

5

「また『環境ホルモン』規制の動きがはじまったようだが……」

日本地区代表は執務机に座ったまま、ことさら穏やかな口調で落ち着きを装いながら、目のまえの男に鋭い視線を投げる。男は相変わらず、黒い髪を長く伸ばしまだし、日焼けした顔は滑つとして、つかまえどころのない。

「はあ……」

男は気のない返事を返す。

「山城……」

思わず、日本地区代表は大きな声を出した。

「……」

山城と呼ばれた男は突然の大声に一段と目を見開き、白目を大きく剥き出して地区代表を見ている。なんで地区代表が大声を出したのか理解できないらしい。

「K省がまた、『内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）』にリスク評価のための生物試験をはじめらしいが、なぜ、K省はまた繰り返し返えそうとするのだ。あれで終わったんじゃないのか」

「……」

「今度も、まえと同じような対応でいいと思うか」

「……」

山城はじつと地区代表に目を向けたまま、口を開こうとしない。「同じことを繰り返してもどうかと思うが、かといって、行政の動きを封じるにはこの方法が一番効果的だと……」

「究極の目的はなんですか。行政官僚を手懐けて、日本の行政機構を牛耳ろうとすることですか、それとも……」

抑揚のない声だ。

「それとも、なんだ……」

「あの連中に取って代わろうというのですか」

「ふむ……」

地区代表は口から声にならない声を漏らし、じっと男を見た。この男は「黒の集団」の世界戦略を知っているのか。あの口振りでは、もしかしたら、世界人口減少作戦はもちろん、日本乗っ取り計画をも知っているのかもしれない。

もし、この男が本当のことを知っているとしたら由々しきことだった。

このことが猜疑心の塊のような議長に知れたらと思うだけで、彼は生きて心地がしなかった。地区代表はもう一度、男を上げしげと見る。

日本地区では自分しか知らない情報だった。最高機密レベルの情報に近づくことすらできない下っ端の男が、どうして「黒の集団」の世界戦略を知ることができたのだろうか。情報漏洩があったのか。だがそんなことはあるはずがない。男がたまたま思い付いた考えを口にしただけにちがいない。彼にはそうとしか思えないし、そう思いたかった。

そう思いながらも、疑いがなかなか消えない。それどころか、疑いがますます肥大化していくのだ。

「われわれはそんな大それたことは考えない」

「え？ なにが大それたことなんですか」

男は地区代表の顔に目を据え、じっと見つめている。

地区代表は一瞬、顔一面に汗が吹き出るのを感じた。男の鋭く光る目を

見て「余計なことを言った」と思った。

「もういい。K省の動きをフォローして、逐次報告するように」

地区代表は一方的に言つて、執務機のまえから男を追っ払ってしまふ。

彼は一人になると、とことん追及することなく、半信半疑のまま打ち切つた男とのやり取りをもう一度思い返した。

「それにしても、なぜ、あの男があのようなことを知っているのか」

何度、思い返してみたところでもどうにもなるものではなかった。だが思い返すことを止めることができなかつた。何度も同じ事を繰り返しているうちに、彼はどこからか忍び寄る得体のしれない闇に包まれ、迷いの深みにはまっていた。

6

「ハクリ、われわれが現実の世界と接触する方法にはどんなものがあるのですか。教えてください」

アムンの執務室を出ると、耀は早速ハクリに尋ねる。アムンが母木実子たちと協働してはどうかという。だがこの方法には気が進まないのだ。母からの自立を促した当の本人であるアムンがなぜ自分に母木実子との協働を勧めるのか。母木実子との協働を通して、本当に自立しているかを確かめようとしているのか。

このことは別にしても、現実界のひとと非現実界のものが協働するのは具体的にどうするのか、彼には理解できないところがあった。

「一体同化」の術で、母の身体に入り込むだけでいいのだろうか。そのと

き、一体同化したものと、一体同化されたものの関係はどうなるのか。

一体同化したものが一体同化されたものに取って代わることになるのだろうか。たとえそうだとしても、現実界にいる身体に入り込んだ非現実界の実体のないものがどうやって自己を主張し、どうやって現実と接触するのだろうか。

考えれば考えるほど分からなくなってくる。

ごく単純化して言えば、母と一体同化すれば、現実の母の身体をもった自分が生まれるということなのだろうか。それとも、単に、母の身体のかなに自分も同居するということなのか。だがどちらにしても、彼には気に入らないことだった。

それはそれとしても、母木実子たちが生きていかさえ不明なのだ。生きていくとしても、その行方はいまもって全然分からないではないか。「黒の集団」が動き出しているのに、母木実子たちを探す時間的余裕があるのか。

彼の頭のなかで、さまざまな疑問が渦を巻いていた。

「ヨウ、そんなに急かなくてもいいんだよ。それに……」

「耀ちゃん、アムンはお母さんと会う機会をつくってあげようとしているのかもよ」

未佐が口を挟む。

「もういいんだ、そんなことは……」

未佐が自分をちゃん付けで呼ぶことにも抵抗がある。それよりも自分がA D I児であると知ったときから、母木実子との間に微妙な距離感が生まれているように感じるのだ。それも時間を追うごとに広がっていくらしい。

「お母さんは耀ちゃんにとっても会いたがっているのよ。そんなことを言っ

たら、寂しがるわ」

「そんなことない。独りじゃないんだから。それに……」

彼は生きていかさえ分からないではないかと言おうとして、慌てて口を噤む。

「森野さんのこと？」

彼は返事せずに、後ろを振り向き、いつの間にか姿を消したハクリを探す。遠くにハクリの小さな後ろ姿があった。

「ねえ、耀ちゃん、お母さんたちと一緒に闘わないこと」

背後から、未佐の声が追って来る。

彼はハクリを追う。

「ハクリ、アムンはなぜ母たちとの協働を勧めるのですか。母たちの行方が分かっているのですか。アムンはどんな戦術を考えているんですか。剣でも持つて『黒』と戦わせようというのですか」

「うむ……」

ハクリが振り返り、耀と向かい合う。そして正面からじつと彼の目を覗く。

「アムンはね。きっと、『環境ホルモン』のような合成化学物質汚染問題は消費者レベルの意識改革がなければ根本的に解決することはできないと踏んでいるのだ。現実の世界で消費者一般の意識を改革するには住民運動がなによりも有効だ。だから、あのふたり組を通して住民運動を推進しようとしているにちがいない」

「そうかなあ。まえにも母たちはダイオキシン汚染対策でそんなことをやっていたように思うけど、なんの進展もなかったんだ。そこで、ぼくたちが産廃処理場の焼却炉を爆破したのをみて、母も住民運動を止めてしまい、

産廃処理場の焼却炉を爆破する直接行動に出るようになった……」

「ヨウ、お母さんが焼却炉を爆破していったのは、ヨウのための復讐だったんじゃないのかね」

「復讐……」

「そうだ。わが子の身体を台なしにしたうえ、生命まで奪った産廃処理業者に対する復讐として、ダイオキシンの排出源である焼却炉を爆破したのと思うよ。それは一人息子を奪われた母親の止むに止まれぬ行為だったのじゃないのかね……」

ハクリはじつとヨウを見る。

「……………」

ヨウは口を閉じたままだ。

「だがね。焼却炉をいくつ爆破したところで、このようなことでは『黒の集団』には対抗できない。また、こんなことを何度繰り返したところで、ダイオキシンなどの『環境ホルモン様合成化学物質』を地上から消し去ることは到底できない」

「……………」

ヨウは口をきつく閉じ、ハクリを睨んでいる。

「今回、K省がふたたび規制を指して、『環境ホルモン様合成化学物質』の毒性評価試験を開始しようとしていることに対して、『黒』はそうさせじとさまざまな手を使い、評価試験阻止に動き出している。ここで、われわれはどんな手を打つのが一番いいかということだが……」

「耀ちゃん、もう一度、アムンと話してみましようよ。ハクリ、そうしましよう」

追い付いてきた未佐が耀とハクリの間に入ってきた。

「未佐さん、ちゃん付けはどうも……」

「あ、そうね。いつまでも『お姉ちゃん』じゃないものね。これからは『耀くん』と呼ぶわね」

未佐の脳裏にはいまでも耀の幼いときのイメージがこびりついて離れないのだ。

「……………」

彼は一瞬、未佐の目に寂し気な色を見たような気がした。

未佐は耀の視線を振払うように、勢いよく「さあ、参りましよう。ハクリ」と言い、先頭に立って歩き出した。

7

「もしかしたら、あの男は議長の『回し者』じゃないのか……」

突然、ひとつの疑念が湧いた。地区代表はじつと執務机に座ったまま、疑念を必死に打ち消そうとする。だがあれこれ思い煩い、いろいろ考えているうちに、その疑念は次第に狂暴さを増していく。とうとう手に負えなくなつて、彼は椅子から立ち上がり、机の周りを歩き出す。

議長は腹心を各地区代表のもとに送り込んで、監視を強めているという噂があった。だが彼は心から忠誠を誓い、人一倍熱心に働く自分のもとにまで「回し者」を送り込んでくるとは思いもしなかった。

あの男のどことなく太々しい顔が浮かんだ。従順で頼りがえのある男だと思っていたのが、いつの間に変わつたのか。なぜだ。なにがそうさせてしまったのか。

やはり、あの男は議長の「回し者」なのか。

彼は執務機の左袖の引き出しから分厚いファイルを取り出すと、机の上
に開く。幹部の人事ファイルだ。

「山城謙」のページを開く。

別に、変わった経歴ではない。だが昇進が極めて早い。三年で中堅幹部
になっていた。そしてつぎつぎと大きな仕事を任せられ、成果を上げてい
るのだ。能力を成果につなげる要領が秀でていのか。それともアイデアに
優れ、統率力が飛び抜けているのか。

ふと、立場が逆転しているような錯覚にとらわれ、彼は途中で勢いよく
ファイルを閉じてしまう。

あの男の業績が並外れているとは気付かなかった。男の業績を思い浮か
べると、彼にはまるで、地区代表の地位を山城健に支えられているように
さえ思えてくるのだ。成果を上げる部下に恵まれてこそ、上司の評価も高
まるのに、彼は山城健の存在が疎ましく思えて仕方がなかった。

このままでは地区代表の座が山城健に奪われることになるかもしれない。
彼は不安に駆られ、胸が締めつけられる。議長の「回し者」ものなら、そ
れ相応の対処の仕方がある。だが「回し者」かどうかも分からない山城健
にどう対処すればいいのか。

あの男に対K省の仕事を任せてしまっていたのか。それとも自分が出て
いくべきか。迷う。彼は思案にくれる。いくら考えたところで、迷いは消
えなかつた。迷いが深まるとともに、不安が頭をもたげ、彼を苦しめる。

自分が出て行けたら一番いい。だが、地区の最高責任者である「地区代
表」はあくまで覆面の存在という鉄則があつた。「黒の集団」では、議長
ほか、地区代表といった最高幹部は、素性はもちろん、名も姿格好も世に

知らせないことになっているのだつた。

彼はもう一度、山城健の顔を思い浮かべる。その顔は太々しいまでに自
信に満ち満ちている。この男に任せれば、今回の仕事も必ず成し遂げるこ
とだろう。だが、この男はなにを仕出かすか分からないところがあるのだ。
彼は一層不安に駆られていった。

議長は日本乗っ取り作戦は時期尚早とダメを押ししているのだ。そうはい
つても、あの男なら、そんなことを無視してとことんやり抜くにちがいない。

「そうか……」

彼は思わず、にんまりする。なにもいいアイデアを思い付いたわけでも
なかつた。彼はいつものように、じつと待つことにしたのだ。そして男が
失敗するのをひたすら待つて、男の尻尾を掴もうとしたのだつた。

8

「ヨウにはいいアイデアがあるんだね」

母との協働に気が進まないらしいというハクリの説明を聞きおえると、
アムンは穏やかな顔を耀に向けた。

「われわれが『黒』との現実界での戦いに参加するには、どうしても母た
ちのような現実界に生きている人間との協力関係が不可欠なことは充分承
知しております。これを決して否定するつもりではありません。でも、わ
たしはもつと直接的に『黒』との戦いに関与したいのです。『黒』と直接
闘いたいです」

耀はアムンの目を見て、訴える。

「ほう。たとえば……」

「直接闘い、『黒』を討ち負かすのです。われわれは現実に武器をもって闘うことができません。現実界のひとの力を借りてそうするほかないのですが、そうすれば現実界のひとを巻き込み、傷を負わせる危険が生じます。犠牲者が出るかもしれません。これはできません。ですから、たとえば、わたしが敵の体内に入り込んで、戦意を喪失させるようななかを吹き込むかして、すべての『黒』の連中を『黒』でなくすることができないかと考えているのですが……」

「ふむ、『黒』の連中を『黒』でなくするというのか。そうか。いつそのこと、『黒』をすべて『白』にできたら、なおいい。これはおもしろい。ハクリ、『黒』を『白』に変えるなにかいい方法はないかね」

アムンはハクリに目を移す。

「味方と一体同化するのではなくて、敵と一体同化するわけですか。そして敵の脳に戦意喪失物質を埋め込もうというんですかね。それよりも神経回路を変えるだけで攻撃本能を抑圧できればもつと簡単かもしれない。まあ、理論的には可能かもしれないが、そのまえにどうやって、敵と一体同化するかが問題……」

ハクリは考え込む。

「地上にくまなく広がってしまった『環境ホルモン様合成化学物質』を全面的になくするには、全世界の消費者一人ひとりの意識を変える必要があるでしょう。たとえばそうすることが可能であったとしても、それにはかなりの時間がかかることでしょう。日本の社会は意識改革に対して極めて保守的ですからなおさらです。残されている時間は余りありません。われわれがいま、一挙に、すべての『黒』を『白』に変える作戦にでなければ

ば、地球は『黒』に蹂躪され、『黒』の思うままにされてしまうことでしょう……」

耀は喋りまくる。

未佐が目丸くして、すっかり大人びいてしまった耀を見ている。彼はますます勢いづいていく。

「……また、『白』に変えた『黒』をふたたび『黒』の組織に戻し、内部から組織の崩壊を計ることも考えられます。『黒』を『白』に変えることができれば、まだまだいろんなことが考えられることでしょう」

「なるほど……。ハクリ、なにかいい方法がありそうかな」

アムンはなにやら意味ありげに目配せをする。

「たとえ、敵と一体同化することができたとしても、これは極めて危険なことです。下手をすれば、一生捕らえられたままになるか、逆に自分が『黒』になってしまうおそれがある」

ハクリはあくまで否定的だ。

「確かに、敵のなかに潜り込むのですから、かなりの危険をとまなうことになるでしょう。でも、やってみる価値はあると思います」

耀はむきになる。

「だが誰もそんな危険をおかしたいとは思わないだろうし、誰にもそんなことをさせるわけにはいかないでしょう」

「わたしがやります。アムン、わたしにやらせてください」

耀はアムンに詰め寄る。

アムンは耀の目をじっと見た。それからゆっくり、ハクリに目を移す。「ハクリ、危険性がない方法が見つかったら、それから実行するかどうかを考えることにしよう」

「そんな悠長なことでもいいのですか。敵がもう動き出しているというのに……」

耀はよく分からないが、なぜかこころが急ぐのだ。

「確かに『黒』が動き出している。だが『黒』だけが敵ではない。いま動いている『黒』を牽制し、これを抑えても、これに代わる新たな『黒』が つぎつぎに現れることだろう。ヨウ、このことを決して忘れないように……」

アムンは論すようにようにつぶける。

いま「環境ホルモン様合成化学物質」の大量生産大量消費大量廃棄に加担している「黒」たちを排除できたとしても、これで地上から「環境ホルモン様合成化学物質」がなくなることはないだろう。このような合成化学物質をつくり出す元凶ともいえるべき仕組みやシステムが残っているかぎり、ふたたび同じような化学物質が合成されるからだ。

その元凶的仕組みやシステムとなっているのが、人間がつくり出した現代科学技術文明である。それゆえ、地上から「環境ホルモン様合成化学物質」を取り除こうとするなら、現代科学技術文明を見直すか、それともこれを一掃しなければ、同じことが何度も繰り返されるだけだ。

だから、たとえ当面の対「黒」作戦といえども、現代科学技術文明の見直しやその一掃をめざすなかで、その一環に位置付けられるものでなければならぬ。

「……ヨウ、だから、これからの『黒』との闘いはエンドレスのものとなるかもしれないんだよ。終わりになき闘いだ」

アムンは反応を窺うように、じつと耀を見ている。

彼は「覚悟はいいか」と問われているように思え、反発するように、こ

とさら目を凝らしてアムンを見返す。だがなぜ「天の組織」がそこまでやろうとするのか、彼にはふに落ちないのだ。

アムンは口を閉ざしたままだ。

「エンドレスの闘い……、ですか」

彼はいささか反抗的に言う。

「『天の組織』がなんのためにそこまでやるのかと思っっているかもしれないが……」

凶星だった。アムンにはひとのこころのなかが見えるのか。彼は目を大きくしてアムンを見る。

「本当のところ、『天の組織』にとつては、地球人類が絶滅しようがどうなろうとどうでもいいことだ。われわれが『黒の集団』に対抗するのは地球人類を絶滅から救うためにやっているのではない」

「では、どうして『黒』とエンドレスの闘いとなるのですか」

「われわれと『黒』の闘いがエンドレスだということではない。地球人間同士で『黒』対反『黒』の闘いがエンドレスにつづくということだよ。それは地球人類が地上からひとり残らず消え失せるまでつづくということだよ。いまの地球人は喧嘩好きで、相手を倒すことに生き甲斐を感じているようだからね。この性根はなかなか直らない」

「喧嘩好き？」

「戦争といつてもいいし、競争といつてもいいが、手段を選ばず、とにかく、互いにいつも相手から勝とうと腐心しているようにしかみえない。なぜかは知らんがね。地球人の現代文明にはそのようなにかしらひとを駆り立てる仕組みが隠されているのか、それともともと地球人にはそのような性質が備わっているのか。とにかく、最近、とみに著しいと思えて仕

方がないんだがね」

「……………」

「このまま放つとけば、地上には『黒』のような集団が無数に現れ、地球規模で地球人同士の殺し合いがはじまり、いずれ、地球人は絶滅することになるだろう。だから、いま、なにも『天の組織』がちよっかいを出して『黒』をやっつけることはない。われわれは、このまま、じつとみているだけでいいのだ」

「……………」

「現に、地球規模の地球人同士の殺し合いはすでにはじまっている。地球規模ではまだ、目に見えるかたちで核兵器や化学兵器などの大量殺戮兵器は使われていないが、地球人に緩慢な死をもたらす『環境ホルモン様合成化学物質』など、さまざまな有毒合成化学物質が環境に大量にばら撒かれてしまっている。地球人類は緩慢ながら、確実に絶滅への道を歩み出しているのだよ」

「じゃ、なぜ……………」

「ヨウはなぜだと思いかね。われわれが敢えて手を貸そうとするのは、まだ、一縷の望みを抱いているからだよ……………」

アムンはこんなことを言う。

地球人には節度がないのか、すでに限度を超えてしまっているようだ。ことに、現代科学技術文明は止まるところを知らず、膨張しつづけている。地球の有限の壁を超えても、なお巨大化高度化大量化へ邁進しているのだ。このため、地上のあらゆるところで取り返しのつかない汚染や破壊が行われ、いまや地球規模の環境汚染や環境破壊が生じてしまい、地上を覆う生物生態系がいたるところでずたずたに引き裂かれてしまっている。

地球を漁り、とことん貪り喰い荒らし、台無しにしている地球人は、それでも飽き足らずに、宇宙へ飛び出し、宇宙を汚染し出している。

「……………」に、現代科学技術文明において問題なことは、リスクを無視した跛行的な巨大化高度化大量化だ。いまの地球人は現世本位で、将来のツケには目を塞ぎ、目の前のご馳走に手を伸ばし、ご馳走だけでなく、その皿まで食べようとしている。その端的な例が核技術だ。核兵器の開発過程で世界中に大量の放射性物質をばら撒き、地球規模の放射性汚染をもたらしている。また、核の平和利用と称して、使用済核燃料の後始末もできないのに、原子力発電所を世界のいたるところで稼働させ、何度も大事故を起こしては大量の放射性物質を放出し、これまた、何十年何百年何千年何万年にもわたる地球規模の放射性汚染を引き起している始末だ」

「……………」
「こうしていまや地球はすっかり放射能や合成化学物質などで汚染され、破壊されてしまっている。やがて地上には何百年何千年何万年にもわたって人間が住めないようになるだろう。それでも飽き足らず、地球人は『地球がダメなら、宇宙があるさ』といった調子で、あわよくば新たな獲物（資源）を得ようと、宇宙に目を向け出している。だがすでに地球の周りの宇宙空間にも人工衛星の残骸や破片などによる一大汚染帯ができていないか。彼らは早晩、他の星を征服しようと地球を飛び出し、悪しきDNAを宇宙にばら撒くことだろう。これだけでも防がなければならぬのだ」

「地球人のすべてが、そういつた『黒』の連中のようではないと思いますか……………」

「そうだね。ヨウのお母さんのようにね。そこに一縷の望みをかけている

んだよ、われわれは。そしてできれば、手助けしたいと思っている。われわれは『黒』に対して直接手を出すことができないし、地球をどうこうすることもできないからね」

「それで、地球人との協働ということですか……」

これまで黙ってふたりのやりとりを聞いていた未佐が口を挟む。そして耀を振り返り、じつと見る。

「そうだ。地球人が互いに殺し合うまえに、問題の多い現代科学技術文明を見直し、そして新しい地球文明を創って欲しいのだよ。現在、地球人たちは相手が破滅するまで競争だ、なにをやらうと自由（勝手）だ、と振舞っているが、相手を蹴落とすことばかり考えずに、互いを尊重し、互譲の精神をもって互いに助け合うような社会をつくり、地球を愛しんで欲しいものだ。まあ、なにを選択するかは地球人自ら決めることだし、われわれが手を貸すこともない。だが、いまの地球人の行動をみると、まるで自ら絶滅への道突き進んでいるように思えるのだ……」

アムンはしばし耀に透明な目を向けていた。それからハクリと未佐に視線を移すと、金属性の声を一段と張り上げて「大分、喋り過ぎたようだ、終わりにしよう」と言い、三人のまえから姿を消してしまった。

9

「耀ちゃん……」

「……………」

「間違えたわ。ごめんね。耀くんだったわね……」

未佐は黙って振り向く耀を見て、急いで、言い換える。そして「お母さんを探そうか。きつと、ふたりは元気ではずよ」とつぶける。

「未佐さんにどうしてふたりが元気であると分かるの。ぼくが訪ねたときには、一軒家は跡形もなかった。ふたりは突然襲ってきた竜巻に一軒家もろとも飛ばされてしまったにちがいない……」

彼は母の姿を一目見ようと、湖畔の一軒家を訪れたときの情景を思い浮かべ、顔を曇らせる。誰がなんと言おうと、母が元気ではずよとは思えないのだ。

「え？ 竜巻で飛ばされた？ ホントなの……」

「……………」

彼は黙って頷く。

未佐は半信半疑の目を向ける。そして彼女は以前ふたりを訪ねたときのことを一部始終話す。

耀の母木実子と森野は産廃処理場の焼却炉爆破実行計画が一段落すると、湖畔の一軒家でひっそりと暮らしていたが、一時「黒の集団」によって禁状態だった。だがその後、ふたたび訪れたときには、等身大の人形を残してふたりはどこかへ移つたらしく、一軒家はもぬけの殻だったのだ。

「ハクリとわたしが一軒家を訪ねたときには家のなかに誰もいなかったはずよ。ソファにふたりに似た人形が置いてあっただけよ」

未佐は同じことを繰り返した。

「……………」

彼は口を固く閉じ、じつと未佐を見ている。

母が生きていると思いたかった。だが土台のみ残して跡形もなく飛ばされてしまった一軒家の跡地を思い浮かべ、彼はうなだれるほかなかった。

そのとき以来、彼は自分から母のことを話題にすることはなかった。彼は母を自分のところのなかにだけ留めておくほかなかったのだった。

「ハクリ、そうだったわね。だから、竜巻が襲ったとき、一軒家にはふたりはいなかったはずよ」

「ミサ、なにか用か……」

ふたりから離れて、なにやら考え事をしていたらしいハクリが歩み寄る。

「ハクリ、それは本当ですか」

母は生きていたのか。彼は未佐とハクリに目を向けながら、大勢の消防隊員による陸上や湖面の捜索にもかかわらず、とうとうふたりの遺体が見つからなかったことを思い浮かべる。

「本当よね、ハクリ。ふたりは一軒家にいなかったわね」

「そう。ソファには身替わりの等身大の人形と入れ代わっていた。わたしがソファのところに行つて確かめたから間違いない」

「……………」

耀は口をもぐもぐさせた。もしかしたら、母が生きているのかもしれない。そうと思うと、声を出したくても、声にはならなかった。

「ふたりは竜巻に襲われるまえに一軒家を出ていたのよ。それは確かよ。」

『黒の集団』から逃れたのか、それとも彼らに拉致されたのかは分からないけど……………」

「……………」

耀は目を潤ませ、口を動かすが、声にならない。

「ふたりは元気はどこかにいると思うわ。耀くん、探しに行こう」

未佐はしきりに耀を揺さぶる。

「ヨウ、ミサの言う通りだ。ヨウのママは行方不明だけなんだ。早く、探

してあげないと、本当にいなくなってしまうぞ。ヨウ、それでいいのか」
ハクリまでが煽り出す。

「うん……、分かった」

彼は短く応える。いま口にできる言葉はそれが精一杯だった。もう会うことができないと思っていた母が生きているらしい。こう思っただけで、彼は胸が一杯になり、嗚咽が込み上げてくるのだ。だが彼はなにごともないかのように冷静さを装う。母から自立したいま、そうするほかないのだと自分に言い聞かせていたのだ。

第二章

10

K省の「環境ホルモン様合成化学物質（内分泌攪乱化学物質）」の対する毒性評価試験実施計画がマスコミで大々的に報道された。これに対して、業界団体は極めて迅速にさまざまな対抗行動を起こす。

大分まえから準備していたのか、矢継ぎ早に、環境ホルモンと疑われているさまざまな合成化学物質についての動物実験の研究成果が報告された。研究報告者はA大学のA教授、B大学のB教授、C大学のC教授と異なるが、結論はみな同じで、暴露実験では有意な影響が認められず、毒性を否定するものばかりだった。

そんななかで、K省内部において「環境ホルモン様合成化学物質（内分泌攪乱化学物質）」についての専門家を委員とする検討会が開かれた。事務局は担当課にあり、幹事役はその課の課長補佐と係長があたる。委員は専門家といっても、K省（事務局）が選んだ専門家で、いわばK省の息が掛かった人たちだった。

「いたずらに検討対象を広げるべきではない。毒性評価試験の目的が将来の規制のためのデータ収集なら、これまでの研究報告ですでに毒性が確認されているものに限定してはどうか」

「再チェックだけなら、国がわざわざ毒性評価試験をやる意味がない。折角やるなら、環境ホルモンと疑われている合成化学物質をできるだけ多く対象とすることだ。それで白黒をはつきりすればいい」

「そうはいつても、毒性評価の方法さえ十分確立しているといえない状況ではムリだ。まずは対象を絞って、試験方法や評価方法の妥当性をも確かめることだ」

「風評被害をおそれ、毒性評価の対象に選ばれることすら、企業は嫌がる。評価対象とする合成化学物質の選定は、十分慎重にやる必要があるだろう。『環境ホルモン様合成化学物質』という曖昧な言葉を使用すること自体、問題だと思う」

「毒性試験は客観的に行うべきであるが、評価に際しては、当該合成化学物質がどのように利用されているかをも考慮すべきだ。多少リスクはあるても、適当な代替物質がなく、無くては困るかけがえのないものもある。たとえば、現に社会に広く使用されているプラスチック類などが少々の毒性で使用禁止なるようなことになれば、そのほうの影響が大きいと思う。このような点から、毒性試験は慎重に行なうべきだし、その結果が独り歩きしないように、十分配慮しなければならない」

「そうはいつても、毒性が確かめられれば、放置することはできないだろう。国としては、そのようなときには早く代替できる合成化学物質を開発できる方向にもつていくことも考えておかなければならないのではないか」

「とりあえず、できるだけ対象を絞って試験を実施し、その結果を見て、つぎの段階へ移ることにすればいいのでは」

検討会での議論を踏まえ、結論が纏められたが、当たり障りのないものだった。これに基づき、検討会のなかに研究室が組織され、毒性試験が実施に移されることに決まったものの、具体的な実施計画が策定されたときには、業界サイドの研究報告作戦が功を奏したのか、検討課題は一段と狭い範囲に限定され、評価試験の対象合成化学物質の数も減り、評価する毒

性の範囲も狭ばまれていた。

結果的に、毒性評価試験実施計画の対象合成化学物質は当初よりさらに絞り込まれ、そしてこれまでの実験でほぼ毒性が確認されたものに限られることになったのだった。

11

「代表、対象を絞り込むことにはかなり成功しましたが、ビスフェノールAを外すことはできませんでした」

「で、試験対象の合成化学物質は……」

地区代表の鋭い目が光る。

「これです」

山城はコピーを差し出す。検討会で配られた資料だ。そのなかから「試験対象合成化学物質(案)」の一覧表を取り出す。大半に横棒が引かれて消されており、試験対象合成化学物質は半数以下で、数えるほどに減ってしまっている。

地区代表はしばらく一覧表を眺めていた。それから検討会の資料に目を移す。

「いつ結果が出るのかね。研究計画案では三年計画になっているが……」

「三年の間、なんらの成果報告もなされないということはないでしょう。それよりも途中で計画内容の見直しや修正がなされるかもしれません。なにしろ、その資料は検討会を通すために作成されたものですから、必ずしも、K省の意向がそのまま出ているとはかぎりません。なにしろ、担当課

のなかにはなんらかの規制をしなければならないと考えているひともいるようですから」

彼は地区代表の目の光に気付いていたが、素知らぬ振りをして、淡々と応える。それよりも、彼に資料のコピーを手渡したときの上田教授の狡せうな目付きが脳裏から離れなかった。

「そうか。分かった。それじゃ、自分、様子を見るか。なにか変更があれば、その都度報告するように」

「実は……」

別に特段の用事はなかったが、地区代表がなぜ早く話を切り上げたがつているふうを感じ、彼は探りを入れる。

「なんだ……」

一瞬、地区代表が嫌な表情を覗かせた。

「お忙しければ、後にしますが……」

彼は頭をフルスピードで回転させる。

「なんだ」

「実は、上田教授のことですが……、検討会の委員をしている方ですが……」

「どうしたというのだ」

「国際会議に出席するようで……、それで……、その費用として一〇〇万ほどと入用だと言っているのですが、『海外における環境ホルモン事情調査』というテーマで、委託を出すことで処理してよろしいでしょうか」

「一〇〇万か。で、その先生は……」

「K省ではかなり顔がきくほうでして、検討会の事務局(担当課の課長補佐、係長)の連中とも昵懇で、いろいろ相談にのっているそうです。今回

の事務局原案の作成にも加わったという噂です。それに研究班の主査を引き受けるらしいです」

彼は少々どころか、大いに誇張して言う。

「分かった。そういう先生は大事にしなくちゃな」

「はい。畏まりました」

少々後ろめたさを感じ、彼はことさら丁寧を受け答える。

地区代表が机上の時計に目を向けたのを機に、彼は踵を返す。そのまま、さっと代表執務室を出てしまう。

彼にはひとつの計画があった。この機会を利用して、K省との人脈を構築しようしていたのだ。自分の机に戻ると、早速受話器に手を伸ばす。

「上田先生、山城です」

彼は委託調査の名目で、旅費の提供を申し出る。

「なんだって……」

「来月、パリで開催の国際会議にご出席なさるのでしよう。その折に、ヨーロッパでの環境ホルモンについての研究状況を調べていただけませんか」

「どんなことを調べるの……」

調査の内容はどうでもよかった。だが、教授とやり取りしているうちに、検討会事務局が欲しい情報を集めることにしてはどうかということになった。

実は、これは彼の作戦だった。事務局担当の課長補佐と係長に最新情報の提供によって恩を売り、昵懇な関係を築くのだ。これを通して信頼関係ができれば、抜け目ない官僚はなにかにつけて彼を利用しようとしてくるにちがいない。そこが彼の付け目だった。

「じゃ、恐縮ですが、先生からお声をかけていただいて、一度、事務局の

担当者と懇親する席を設けさせてください。お願いします」

彼は受話器を戻すと、椅子に深くと腰を下ろし、教授からの電話を待った。

12

「耀くん、早くお母さんたちを探さなくては……」

ブースに戻ると、早速、未佐は耀を誘う。だが何度も誘って、耀はじつと彼女の顔を見るだけで、動こうとしない。

「耀くん、身体の調子でも悪いの……」

「別に、どこも悪くない」

「じゃ、どうして……」

「探すって、変じゃないか。別に探さなくても、ただ念ずれば、ママのもとへ飛んでいったじゃないの。この前だって、そうしただでしょ」

彼は未佐と何度もそうしてきたことを思い返す。いまもそうするだけでいいではないか。なにもわざわざ探す必要なんかはないはずだ。それなのに、なぜ、探さなければならぬのか分からない。念ずりさえいいのに、何度も「探しにいこう」という未佐の誘いに違和感を覚えるのだ。

彼は最後に一軒家を訪れ、竜巻で跡形もなく飛ばされたことを知ったときから、母が生きているとは思ってもみなかった。そしてもう会うこともないし、会いたいと思ってもいけないところを決めていたのだった。

だから、なおのこと、未佐の執拗な誘いに、強い違和感というより、むしろ不快さを感じるのかもしれない。

「そうか。なにもなかったら、そうしてもいいんだけど、お母さんたちがいまだんな状態に置かれているか分からないの。だから不用意に接触できないのよ」

未佐は「黒の集団」の監視下にあった一軒家に木実子を訪ねたときのことを一部始終話す。あるとき、一軒家を監視していた「黒の集団」が訪問する未佐の姿を捉え、彼女を捕らえようとしたのだった。

「見つかったの、『黒』の連中に……」

「彼らは家中を徹底的に調べ回ったわ。わたしは木実子さんと一体同化していたので見つからなかったけど。でも彼らは執拗に捜し回るので、しばらく彼女から離れることができなかったのよ。だから、用心深く、十分気をつけないと……」

「分かった」

そう応えたものの、彼はまだ半信半疑だった。母が生きていと言われなくても、最初はとも信じることはできなかった。未佐もハクリも気休めに言っている過ぎないと思えて仕方がなかった。未佐がいくらそうでないと言っても、なかなか信じられなかった。もし生きていけば、なにも探し回らなくとも、会おうと思えばいくらでも会えるはずだと思っていたのだ。

だがそうでなかった。詳しく話を聞いて、ようやく会いたくても会えないのだということが分かりかけてきた。

竜巻のまえに、母たちは一軒家から拉致されたのだろうか。そしていまもどこかで「黒の集団」の監視下に置かれているのだろうか。

それとも、もしかしたら、竜巻来襲時のどきどきに紛れて、母たちは等身大の人形を身代りにして「黒」の目を惑わし、彼らから逃れたのではなからうか。もしそうなら、気になる「黒」の監視はないはずだ。でも「黒」

から逃れたのなら、いまも「黒」はふたりを探し出そうと追跡しているかもしれない。

拉致されたにしても、また、逃げ出したとしても、「黒の集団」とのかわりは断ち切れずに残っている。どちらにしても、母たちに安易に近づくことは危険なのだ。

ようやく、彼は未佐の深いところ配りを理解できた。と同時に、激しい感情が込み上げてきた。

彼には衝撃だった。もう会うことがないと思っていた母が生きていのだ。それにしても、母はどこにいたのだろうか。

急に、母に一目会いたいと思う。

「早く、探そう……」

思わず、彼の口から突いて出る。

「耀ちゃん、あ、耀くん……」

未佐の目が潤んでいる。

「まず、ふたりを探し出して、そのうえで、ふたりがいまもって『黒』の監視下にあるかどうかを見極めなければならないのよね。ハクリ」

いつの間にか、未佐の隣にハクリがいる。

突然、壁のスクリーンに映像が映り出された。ハクリが操作したらしい。手にリモコンの端末機を握っている。

未佐がハクリから端末機を奪うと、めぼしい地点を写し出す。

一軒家のあった湖畔だ。そこにはいまはなにもない。木実子が住んでいた家のある団地は……。耀と襲撃した産廃処理場……。

彼は目を凝らして母の姿を探す。映像は目紛しく変わるが、それらしい姿を見つけることはできなかった。

こんなことをいくら繰り返しても、母の居場所を突き止めることはできないのではないか。そう思いながら、彼はなんとか母を探し出す方法がないかと思ひ巡らしていた。

13

「山城くん……」

上田教授だった。

その日の午後遅く、突然、電話があった。検討会事務局担当の課長補佐と幹事役の係長に声をかけているので、都合が付けば、お連れするという。彼は早速、官庁街からそう離れていない高層ビルにある老舗の懐石料理の店に席を用意した。

予約した個室で独り待ったが、三〇分待っても、誰も現れない。彼は苛々しながら、襖を開け、廊下をのぞく。絨毯を敷き詰めている廊下に人の気配はなかった。襖を開放したまま、彼は冷えてしまったお茶を一口含む。

突然、大声で話す声がした。上田教授と係長だった。

「山城と申します。貴重なお時間を割いていただきまして有難うございませ

す」

彼は急いで立ち上がると、愛想笑いを浮かべて、係長のそばに歩み寄る。

太めの身体をふたつに折って深々と頭を下げ、両手で名刺を差出す。係長は竹下といった。童顔なのに、時折狡猾そうな目つきをする痩せた風采の上がない小男だった。有るか無しかの短い首のうえに乗っている丸味を帯びた輪郭の童顔が、尊大な顔付きになったり、卑屈な笑いを浮か

べたり、目紛しく変化する。一見、若く見えるが、四〇代の前半だろうか。

彼は値踏みしながら、竹下という男の将来を推し量る。でもなぜ本命の課長補佐が一緒でなかったのか。課長補佐はあとで合流するつもりなのか。

本省ではキャリアーの若い課長補佐に、年嵩のノンキャリアーの係長を組み合わせることが多い。将来、課長、部長あるいは局長といった幹部になるのは、大半が大学を卒業し、その年の国家試験に合格したキャリアー組なのだ。

彼は数多くの若い課長補佐と知り合い、布石を打っておきたかった。将来有望な官僚と人脈を築いておくことは、未来戦略に欠かせないことなのだ。

「課長補佐は国会対応で席を外せないのです。わたしもまた、直ぐ役所に戻らなければなりません」

彼の気配を感じ取ったのか、竹下は仲居が持ってきたお絞りを拡げて顔を拭きながら、口のなかでぼそぼそと言う。

それを受けるように、すかさず、上田が最初軽くビールで、すぐ食事を出すように、仲居に言い付ける。

上田教授と竹下係長はたわい無い雑談を交わしながら、ビールを飲み、運ばれてきた料理を平らげていく。彼は笑みを浮かべて、もっぱら聞き役に回る。

係長は時折腕時計に目をやる。役所に戻る時間を気にしているのか。

役所へは歩いても数分の距離だったが、デザートが出たところで、彼はタクシーの手配し、タクシーチケットを用意する。

「それじゃ、今日はこれで」

「また、近いうちに」

係長はそそくさと立ち上がる。彼は上田教授を残して、係長を送つていく。

席に戻ると、年配の仲居が後片付けをしている。教授の姿がなかった。

「あれ、帰ったのかな」

「お連れさんですか。トイレじゃないですか」

仲居は後片付けの手を休めることなく、応える。きれいに片付いたテーブルにお茶とお絞りを並べて、出ていく。

「竹下くん、なにも言わずに帰ったかね」

教授が戻ってきた。

「はあ……」

「いつもなら、銀座へ行こうなんて言うんだが……」

教授は目を光らせている。

「今日はどうも有難うございました」

銀座へ行きたいのは教授だろう。彼は素知らぬ振りをして、大仰に頭を下げる。

「ところで、先生。つぎは必ず課長補佐をお願いしますよ」

「ふむ、あのヤツ、若いのに堅いんだよね。もう少し融通がきくといいんだが……」

「そうですね。でも、将来の有望株でしょ」

「そうだろうな、ああいうタイプは。あ、調査の件、話しておいた。やつこさんも関心をもってあれこれ言っていたが、それに合わせて調べてこようかと思っている」

「じゃ、委託調査費は旅費込みで一〇〇万ということをお願いします。で、どこへ振り込みますか」

「それじゃ、この研究費の口座がいいかな」

教授はメモ用紙に書き込み、差し出す。

「じゃ、明日にも……。ところで、先生。研究班のメンバーは決まりましたか」

「一寸、もめてね。課長補佐に心当たりがあるのか、なかなか、うんと言わないんだよ。ここに来るまで話していたんだがね」

「検討会はどんなシナリオを描いているんですか」

「なにしろ、今回は二度目で、前回のときと違い、研究もかなり進んでいる。それにマスコミも以前よりなにかとうるさいからね。事務局の迷惑通りにことを運ぶのは難しいかもしれない」

「それじゃ、なおのこと、研究班のメンバーの選定が肝心ですね」

彼は一步踏み込む。

「まあ、そういうことになるかね。だからといって、あきらまかにこつちのサイドばかりを集めるわけにもいかないんだよ。かといって、反対サイドは願い下げだな。まあ、あからさまに反対の言動を弄するものは排除せざるをえないが、少しはもつともらしい発言をするものもいたほうがマスコミ受けもいい。こういった連中を探すことになるが、誰か心当たりはいないかね」

「動物実験でデータを集めるんですよ、研究班では。その場合でも……」

「だから、なんだよ。データの独り歩きは怖いからね」

「先生は顔が広いから、適任者を探すことは……」

「そうでもないんだ。なにしろ、新しい分野だから、この分野の研究者や専門家は少ないんだよ。分析屋からの転向組もいて、まあ、玉石混濁のなから選ぶことになるので、当たり外れがあるだろう。へたをすれば、火

傷しかねない」

アルコールが入っているせいか、教授はべらべら喋りまくる。彼はこの先生のほうが危ないんじゃないかと思ってしまう。

「先生、銀座はこのつぎにしましょう。タクシーを呼びますよ」
彼は竹下の狡猾そうな目を思い浮かべながら、立ち上がった。

14

「ああ、これではダメだ。いつまでもこんなことを繰り返してもしようがない。未佐さん、ぼくが母のもとへ飛ぶことにします。ぼくのあとを追って、スクリーンで母の居場所を確かめてください」

耀は業を煮やして、叫ぶ。

母たちが居そうなところをつぎつぎと入力するが、何度やっても、スクリーンの映像には母の姿はなかった。すべて空振りだった。

とうとう、母たちを見つけたすことはできず、彼は別の方法を取ろうという。彼はここに念ずれば、瞬間的に、思うところに飛んでいける「瞬間移動の術」を使おうとしていたのだ。母のそばまで行って、母たちの居場所を探ろうというわけだ。

「それは危険よ。『黒』に囚われているかもしれないのよ。そんなところへ行ったら、わざわざ敵の捕虜になりにいくようなものよ」

「そんなに心配しなくてもいいよ。母たちの近くには行かずに、離れたところから母たちの様子を窺い、すぐ戻ればいい」

ハクリがふたりのやりとりを興味深そうに見ている

「お母さんと接触して、異常がないかどうか確かめなくても大丈夫かしら。ハクリはどう思う？」

未佐はハクリを振り返る。

「そんなにそばへ近付けば、敵に感付かれるかもしれない。敵に感付かない程度に近付いて調べれば……」

「それはそうね。だから……」

「近くまで行ったらすぐ戻ることにして、あとはスクリーンの操作で、お元気かどうかを確かめることにしたらいい」

「それで確かめられるの」

「うまくいけば……」

「大丈夫かしら」

「心配するまえに、まず、やってみたら」

「そうだ。やってみよう。じゃ、いいね。行くよ」

彼が走り出した。

未佐は慌てて、スクリーンを操作し、耀を追う。

スクリーンに緑の森が広がった。

目の前に鬱蒼とした森が近づく。木々がスクリーン一杯に広がる。耀の姿が消えてしまった。

彼女はスクリーンを操作して、耀が消えた森のなかへ入っていく。木々の隙間を通り抜け、奥へ奥へと入っていった。

木々の間に、突然、平屋の山荘風の建物が現れた。平らな屋根には大きな煙突が突き出ている。人が住んでいるのか、エントランス横の壁際に薪が大量に積んであった。

耀の姿を捉えた。建物の内部を覗こうとしているのか、耀は建物に近づ

いていく。一瞬、光が走った。

「耀くん、危ない……。戻りなさい」

つぎの瞬間、耀は反射的に身を翻し、空高く上っていった。

「耀くん、聞こえる？」

未佐は繰り返して、耀を呼ぶ。

15

「チーフ、怪しいものがKキャンプに近づいてきたので追いました」

「なんだって、バカ。捕まえて、身元を確かめるんだ」

山城は思わず、大声を出す。

「とにかく、素晴らしくすばしっこいやつでして……。今度現れたら、必ず、とっ捕まえるようにします」

担当の男が小声で言い訳がましく言う。

「で、なにで追っ払ったんだ」

「レーザービーム……」

「なんだと。なんで、そんなものを使ったんだ」

一瞬、彼は一軒家作戦での苦い経験を思い出し、なにかの間違いかと思っただ。辺り構わず、Kキャンプに近づくものにレーザービームを浴びせるといふのか。これでは侵入者を追い出すだけではないか。

「遠隔操作できるものはそれしかなかったの……」

「ふむ、それでどんなやつだ。目的はなんだ」

「若い男のようですが、なんのために近づいてきたのか、いまのところ不

明です。もしかしたら、あのふたりと……」

「なんだと。例のふたりはまだ居座っているのか。あのふたりは大分まえに釈放しているはずじゃないのか」

「いまもって居座りつづけて動こうとしないのです。早く、強制的にでも移動させたいと考えているのですが、いまだに適当な移転先が見つからないので……」

「じゃ、いまも施設内にいるんだな」

「はあ……。ふたりはまだKキャンプの施設のどこかにいるらしいです。そこへ近づく怪しいものを発見したので、急遽、設置してある装置からレーザービームを発射したというわけです」

担当の男はあくまでも自分の行為の正当性を主張したいらしい。

「分かった。そいつはふたりと関係のあるやつかもしれないな」

彼は一瞬「『天の組織』の一味か」と思う。もしそうなら、厄介なことになる。「黒の集団」の秘密基地であるKキャンプの全容があつた連中に知れば、われわれのマル秘行動が白昼に曝されることになるだろう。これはなんとしても阻止しなければならない。

「そうとも考えられません」

のんびりした声が返ってくる。

「おい……」

彼はのんびりした声に苛立ち、荒々しい声を出す。

いまになつて、彼はふたつをKキャンプ内の施設に収容したことを後悔していた。拉致しなければよかったか、とさえ思ってしまう。

「で、怪しいやつの写真は……。撮ったんだろな」

「すみません。撮ることはできませんでしたが、監視カメラには写ってい

るかもしれませんが……」

男は一層小声で応える。

「じゃ、そのビデオを転送してくれ。監視をつづけるように」

「はい。分かりました」

彼は受話器を返すと、執務機のモニターに目を移す。

すでに、ビデオが転送されていた。彼は再生する。

なにも写っていない画面に、数秒後、小さな人影が現れた。ようやく透明体識別装置が作動したらしい。人影は次第に大きくなっていく。

突然、光が走る。人影は踵を返すように、方向を変え、急上昇していく。

見る間に、小さくなり、点となって消える。

彼はビデオを巻き戻し、ふたたび再生する。人影が大きくなったところで、再生をストップする。そして頭部に照準を合わせて画面をズームアップしていく。

横顔か。まだ小さい。倍率を上げていく。だが、ズームアップすればするほど映像はボケてしまい、ますます不鮮明になっていく。

彼はゆっくり倍率を下げる。

「あ、これは……」

どこことなく見覚えのある輪郭だった。誰かに似ている。彼は一心に記憶をたぐり寄せる。だが思い出せない。

何度試みても、どうしても思い出すことができなかった。とうとう断念する。彼は映像をプリントアウトすると、机の引き出しに放り込んでしまった。

「耀くん、戻るのよ。その建物の周りを『黒』が包囲しているようよ」

未佐の声がする。だが、彼は応答せずに、聞き流す。

レーザービームに追われた急上昇したが、そのまま上空に留まり、彼は真上から山荘らしき建物をじつと見下ろす。

正面から近づいたときはこじんまりとして決して大きな建物には見えなかった。だが、真上から見ると建物はかなり大きかった。

一階建ての平屋風だが、天井の高い吹き抜け構造なのか、それとも中二階があるのか、正方形の大きな屋根が二階建てのように高くせり上がり、四方に広がっている。四角い屋根の中央から幾分北側寄りにレンガのかなり大きな煙突が突き出ている。屋根がヘリポートになっているのか、煙突を避け、ほぼ中央に白ペンキで大きな円が描いてあった。

窓はすべて閉ざされ、テラスの大きなガラス戸も閉じたままだ。建物全体が深閑と静まり返っており、人の気配は感じられない。一見したところ、建物は空っぽで、人が住んでいるようには見えないのだ。

母たちは本当にここに居るのだろうか。居るとしたら、この建物のどこにいるのだろうか。

彼は間取りをあれこれ考える。煙突の下には大きなリビングルームがあって、ソファやテーブルが置かれているにちがいない。母はテーブルでノート型パソコンを開いてメールチェックでもしているのだろうか。それとも、ソファでのんびりテレビを見たり、雑誌か新聞を広げているのだろうか。それにしては建物が一寸大きすぎるのではないか。

「なにを悦げたことを考えているんだ。敵中だぞ」

彼は自分を叱り飛ばす。

不意に、手足を縛られ、猿ぐつわを嵌められて、窓のない小さな部屋に放り込まれている母の姿が浮かんだ。ふたりは竜巻の直前に「黒の集団」に拉致され、一軒家からこの建物に連れてこられたにちがいない。

彼は建物の真上をゆっくり旋回しながら、どこかに敵が隠れていないかを丹念に確かめる。

敵の姿はなかった。彼は意を決して、屋根に降り立つ。四方八方に気を配り、レーザービーム攻撃に備える。敵は気付いていないのか、それとも、屋根は監視装置を設置しない空白地帯だったのか。

彼は大きな煙突に近づく。だが煙突の内部は一風変わっていた。普通の煙突とは違い、なかには小型のエレベーターが設置できるほどの空間があった。

もう一度、周りを見渡す。なにも変わったことはない。彼は煙突から建物のなかに入っていく。

彼が下り立ったところには、大ホールだった。天井は思ったほど高くないが、中央に楕円形の大きなテーブルがあつて、一見、大会議室を思わせる。だがいくつにも仕切れば、いろいろその他にも広く利用できるように見える。

大ホールの広い空間には人ひとりいない。人の気配すらなかった。彼は近くのドアから廊下に出て、建物の中を見て回る。

廊下を挟んで、南側にはいくつもの部屋が並んでいるらしい。ドアのひとつを開け、部屋のなかを覗く。宿泊用か、部屋には大きなベッドがあつて、洗面室、バストイレが付いている。

彼は廊下を進み、並んでいるドアをひとつひとつ開けて、部屋のなかを

見てまわり、母の姿を探す。建物中の部屋を見て回ったが、母を見つめることはできなかった。

建物は想像していたものと全然違っていた。間取りは、一見、宿泊施設のある研修会館といった趣だった。だが全体にはそれとは違った雰囲気があった。

なにかどう違っているのか、はつきり意識できない。だが彼にはなにかが違うように感じるのだ。

彼は大ホールの壁際にある大きな暖炉のそばに戻る。そしてそのまま歩き回ってきたところを振り返る。母はどこにもいなかった。だが母がこの建物のどこかにいるような気がする。

彼はいま一度、建物の全体を思い浮かべる。大ホールは建物のほぼ中央に位置し、その周りに廊下が走っている風だったが、東側だけがかなり広いエントランスホールに直に接しているのだ。

宿泊用部屋は大ホールの南側に廊下を挟んで五つ並んでいる。北側には厨房があつた。厨房は西北の角まで伸びていて、西側のほぼ中央にある食料倉庫に連なっているのだ。

大きな洗面室がエントランスホールの北側にあつた。

「どこだ。母はどこにいるのだ」

平屋の建物の一階部分には、まだ彼が覗いていないところは残されていないはずだ。屋根裏部屋があるのだろうか。それとも、どこかに秘密の空間が隠されているのか。

彼はあたりを見回す。大ホールを見上げる。一見吹き抜け風に見えるが、それほどの天井は高くない。とはいっても、大ホールの天井と屋根の間に広い隙間はなく、空間が隠されているようには見えない。それにほぼ平ら

な屋根だ。大ホールの天井裏には屋根裏部屋はムリだ。

大ホールに比べ、天井の低い宿泊用部屋の天井裏には屋根裏部屋を設けることができそうな空間はありそうだが、そこへ通じる階段や入り口らしきものは一切見つからなかった。厨房や倉庫にもなんの仕掛けもなかった。

もしかしたら、母たちは丁度逃げ出ていったばかりだったのかもしれない。それとも、彼の来襲を感知し、急遽、ふたりを他の場所へ移動させてしまったのだろうか。

だとすれば、いまずぐ追いかけるのだ。彼は姿勢を真直ぐにして、母を強く思い描く。深く念じるのだ。

「ダメだ。そんなことをすれば、まんまと敵の術中に陥ちることになるかもしれないではないか」

彼は思い直して、深く息を吸い、ゆっくり吐いていく。そのとき、ふたび、母が近くにいるように感じた。

ゆっくり、辺りを見回す。なにも変なところはない。彼は大ホールを出て、エントランスホールへ入っていく。

そのとき、ふと、エントランスホールの奥の片隅に、まだ開けてみなかったドアがひとつ残っていることに気付いた。

エントランスは建物の東側のほぼ中央に位置する。東の北端、建物の北東の角には洗面所やトイレがあるが、エントランスホールの南端のコーナーの壁のなかに隠れるように、そのドアがあった。

ドアは壁と同じ体裁で仕上げられている。把手も壁のなかに畳み込まれており、まるで壁の一部のように見える。そしてドアのまえのコーナーには大型のひじ掛け椅子が数脚並べてあって、ロビーふうアレンジされているのだ。

建物の内部を確かめているとき、ロビーの奥の壁にドアらしきものがあることに気付いた。だが壁の裏側には宿泊用の部屋があるはずだし、大きなひじ掛け椅子が通せん坊しているところに、大きな空間や他に通じるドアがあるとは思えなかった。彼はつきり掃除用具などの物入れだと思い、通り過ぎたところだった。

いまになつても母たちを見つけることができずにいたので、彼はこれまでチェックしなかったドアの内部をあらためて確かめてみようと思い直したのだ。彼は急ぎ足でエントランスホールを横切り、ドアにある壁に近付いていく。

急に、外が騒がしくなった。建物の周りをせわしく走り回る靴音が響く。それも一人や二人の靴音ではない。

彼は迷った。引き返して建物の外へ脱出すべきか、それとも見落としたドアを開けて内部を確かめてみるべきか。

ドアは数メートル先にあった。ドアは壁と同じ色で、注意しないとドアがあるとは思えない。把手も目立たないもので、壁のなかに折り畳める方式のものだ。

「秘密の箇所に通じる秘密の扉か」

把手を引き出し、ドアを開く。暗い空間が口を開けた。後方で、人の声がする。彼はドアのなかに身をすり込ませ、ドアを閉める。把手を折り畳むことを忘れたのに気付き、ドアの隙間から手をだし、把手を壁に収納する。そしてドアを閉めた。

それから、そっと、もう一度ドアを少し開け、その隙間からエントランスホールのなかを覗く。

黒い服を着た数人の男がエントランスホールを横切り、どやどやと大ホー

ルへ雪崩れ込んでいった。

彼はふたたびそつとドアを閉め、息を殺し、ドアの陰に身を隠くした。

17

「チーフ、例の怪しいやつがまた現れました。いま、モニターカメラが捉えましたので、画面を転送します」

山城はディスプレイの電源を入れ、画面に目を向ける。大ホールからエントランスホールへ出ていく若い男の姿が写し出されていた。

「やはり、あのやつだ」

彼の記憶が甦った。以前、一軒家で一瞬捉えたが、すぐ姿を消してしまつたやつにちがいない。

なんでこのやつがここにふたたび現れたのか。彼は一心に記憶をたぐり寄せる。

あのとき、地区代表が執拗に一軒家に住む女の情報を求めてきたが、あれはなぜだったのか。女が産廃処理場焼却炉爆破事件に関わっていたこととなにか関連があるのだろうか。

だがそんなことで女の毎日の生活に関わる些細な情報が必要だろうか。それとも、地区代表がこの女に対して特別な感情を持っていたと言うのか。

一瞬、閃くものがあった。神経が痙攣し、つきつきと思わぬことが浮かぶ。

地区代表が欲しがっていたのはこのやつの写真だったのではないか。地区代表は男が女を必ず訪ねてくると踏んでいたのだ。だから、女の毎日の

些細な情報を知りたかったにちがいない。

「あの女は男の母親なのか」

突然、突拍子もなく、脳裏に浮かんだ奇妙な考えに、彼は一瞬戸惑う。

「まさか……」

即座に否定する。だがいくら否定しても、すぐその考えが頭をもたげる。

彼はじつと考え込む。やがて、それはあり得ないことではないという思いが芽生え、次第に、確信へと近づいていく。

「ご用でしょうか」

卓上の小型スピーカーから秘書の声がした。

「秋野木実子関係のファイルを持ってきてくれ。新聞の関係記事のスクラップも一緒に頼むよ」

彼は地区代表がなぜ男の写真を欲しがったのか、その理由を知りたかつた。

女と男の関係を調べるのだ。納得できる情報や理由が見つからなければ、突然湧いてきた奇妙な考えも当てにならないものだということになる。

彼は秘書が持ってきたファイルを丹念に見ていく。大抵は彼が地区代表に送った一軒家での生活の関わるものだった。その他に、地区代表の要求に答え、彼自身が収集して送ったデータもあった。そのなかには彼女に関する情報や関連する新聞の切り抜きの類も含まれている。

「女と男にはどんな特殊な関係があるのか……」

知らず知らずのうちに、彼は多くの情報のなかからふたりの親子関係を証明するデータを漁り出していた。

ふと、疑念が湧いた。女とあの男が親子だとしても、それがなぜ地区代表にとつて重要な情報なのか。

一軒家のふたりを拉致しようとしたときには、彼はそこまで深く考えなかった。対一軒家作戦が一段落し、湖畔から引き上げるに際して、無断でふたりを拉致することにしたのは、地区代表が女にあまりにも執着していたことに対する好奇心だった。それと、強いてあげれば、女がいつかかなにかの役立つのではないかという彼の鋭い嗅覚のなせる技と云ってよいだろう。

どちらかと言えば、ふたりの拉致は彼の一種の気紛れからはじまったものだったが、だんだんことが大事になっていく。

とのかく、ふたりを拉致したことを秘密にする必要があった。そのため、一時的にKキャンプの施設に隔離したものの、このことを隠しておくために、さらに大きな秘密を抱えることになった。ふたりを置っている箇所には、限られた関係者以外の出入りを禁止せざるをえなかったのだ。

常時、モニターで監視をつづける一方で、ふたりにはできるだけ施設を自由に使用させた。これもふたりを拉致してきたことを部外者に悟られないためのものだったが、いくら彼の自由がきくといっても、ふたりをいつまでの施設に留めておくことはできなかった。

かといって、このまま釈放してはこれまでの努力が無駄になってしまう。そこで彼はふたりの体内にさらに強力な発信機を埋め込み、いつでも遠隔チェックできるようにして開放することにしたのだった。

それでもなぜか、ふたりは施設に居座りつづけた。施設にいる限り、食料や飲用水は事欠かない。もちろん、電気、ガスも供給されており、生活には何不自由なかった。誰にも邪魔されず、のんびり過ごすことができることが彼らをずるずると施設に居座りつづけた理由かもしれない、と彼は思っていた。

だがいつまでも施設においとくわけにはいかなかった。些かもてあまし気味に感じていたところに、待っていた男がやってきたのだった。

彼は新聞の関係記事用ファイルを開き、一枚そして一枚、ゆっくり捲りながら、女と男の関係を思い描く。

ふたりは親子だという思いが強かったが、男が「天の組織」と関係がありそうなのが気になっていた。男が「天の組織」の一員でなければ、厳重なKキャンプに近づくことさえ難しいはずだ。かといって、女の息子が「天の組織」の一員であるとは考えられないことだった。

ふと、彼はこんな遊びはもう止めしようかと思った。

「チーフ、施設のどこにも怪しいやつ姿がないそうですが……」

モニター監視担当の若い男だった。

「もう、いい」と言おうとして、彼は急いで口を塞ぐ。そして捲ったファイルのページに目を釘付けにした。

「いますぐ、おれが行く。それまで出入口を厳重に封鎖しておけ。誰も外へ出すな」

彼は思わず大声を発し、席を立つ。

執務机の上には、新聞の切り抜き記事「焼却炉爆発 男児まきぞえ」のページが開かれたままのファイルが置いてあった。

18

「耀くんはどうかしたのかしら……」

未佐は日本ブースで壁のスクリーンに目を向けたまま、呟く。スクリー

ンには鬱蒼と茂る森林のなかに山荘らしき建物が垣間見える画像が映し出されていた。

山荘に近づく耀の姿を最後に、何度呼んでも、応答がないのだ。建物のなかに入ったので、電波が届かず、連絡が付かないのか。

耀は木実子と森野のふたりに会うことができたのだろうか。彼女は耀が母木実子と会った様子を思い描く。

でもふたりと無事会うことができたのなら、すぐにも連絡してきそうなものだった。だがいまだに連絡してこないところをみると、耀はふたりに会えずにいることだろうか。

もしかしたら、ふたりは山荘の秘密部屋や牢獄に幽閉されていて、ふたりに探し出せずにいるのかもしれない。彼女はすぐにも飛んでいって、耀と一緒に、ふたりに探したかった。

山荘のなかでなにが起っているのか。彼女はじつとスクリーンを見る。山荘を取り囲む鬱蒼と茂る木々が不気味だった。

大きな樹木が枝を広げ、太陽光線を遮り、森のなかを闇が支配していた。山荘は闇のなかにあった。山荘のなかでなにが起きているというのだ。

突然、懸命に助けを呼ぶ幼い耀の姿が浮かぶ。耀の身になにか異変が起きたのではあるまいか。強烈な不安が彼女を襲い、幾重にも包む。

「耀ちゃん……」

彼女の口から思わず洩れる。

もしかしたら、不意に「黒の集団」に襲われ、耀は身動きできなくなったのではあるまいか。さもなければ、「黒の集団」が木実子を囮にして誘き寄せ、耀を牢屋に閉じこめてしまったにちがいない。

「ねえ、ハクリ……」

振り向き、後ろを見るが、ハクリの姿がない。急に、パニックに陥り、彼女は居ても立ってもおれず、ブースを飛び出す。

「ハクリ、ハクリはどこ……」

「どうした、ミサ」

「あ、ハクリ、どこへ行ったの。耀ちゃんが……」

「ヨウがどうしたのだ。連絡があったのかね」

「ないの。『黒』に捕まったにちがいないわ。どうしたらいいかしら。耀ちゃんを助け出さなければ……」

「落ち着いて。もう一度、ゆっくりはじめから話してごらん。ヨウがどうしたというんだね……」

「ハクリたつら……」

「ヨウが山荘のなかへ入っていったんだね。それからどうしたの……」

「……」

「山荘へ入っていつてから連絡が途絶えてしまったんだね」

「そう。あれからずっと連絡がないのよ。連絡がないのは、耀ちゃんの身に異変が起きたからにちがいないわ」

「ミサがそう思うのね」

「そう、そうにちがいないわ」

「そう。それで、ミサはどうしたいの」

「助けにいきたい」

「どこへ」

「山荘へ」

「ミサは山荘でなにが起きているか分からないけど、連絡がないから、ヨウが『黒』に捕まったかもしれないと思うんだね」

「耀ちゃんからなんの連絡もないのはヘンじゃないの、ハクリ。きつと『黒』に捕まったのよ」

「ヨウが山荘にいるかどうか呼んでみよう」

ハクリはミサとブースに戻り、ヨウを呼び出す。だが何度呼んでも応答がない。

「ほら、ヘンでしょ」

「届いていないかもしれないし、届いていてもヨウが応答しようとしなくてもかもしれない。どちらか分からないがね」

「耀ちゃんが……、そんなはずないわ。早くしないと、取り返しが……」

「ミサ、落ち着いて。助けに行くにしても、どこへ行けばいいのかわからずに闇雲に出かけるわけにはいかないよ。そんなことをしたら、助けにいったミサまでが『黒』に捕まってしまう。ヨウがどんな状態に置かれているのかわかればいいんだがな。分からないまま助けにいつても助け出すことは期待できないからね」

ハクリは子供に言い聞かせるように、優しく言う。

「とにかく、一度、アムンに話してみよう。ね、ミサ」

ミサはしぶしぶハクリに従い、ブースを出て、アムンの執務室へ向かう。

19

耀はドアの陰で息を殺し、靴音が遠のくのを待った。

靴音が消えた。彼は把手を回し、ドアをそっと押す。エントランスホールには人影がなかった。

ドアを開け、彼はエントランスホールへ出ていく。ロビー風にアレンジしたコーナーで立ち止まると、ドアに一番近い肘掛け椅子のひとつに腰を下ろし、辺りを見回す。

誰もいない。透明な彼自身の姿も見えない。「天の基地」から外へでれば、いつも透明体でなければならぬのが「天の組織」の教えであり、掟であった。特別の識別装置がなければ、透明体である彼の姿を見ることができないのだ。

誰にも見えないからといって、人気のないロビーで、彼はのんびりと椅子に背をもたげていたわけではない。前かがみになって、前へ進むべきか、後へ退くべきか、思案にくれていた。というより、迷っていた。

「黒の集団」が迫ってきている。大ホールから足音がする。

早く、逃げ出せばいいのに、ここにブレーキが掛かっているのか、そんな気になれないでいたのだ。

母たちを探しに来たのに、いまだに姿を見ることはおろか、行き先さえ掴めずにいる。すべてが無駄だったのか。やはり、未佐の言う通りか。

いや、そんなことはない。近くにいるはずだ。彼はゆっくり頭を回した。見渡す範囲に人影はなかった。

彼はどうすればいいのかわからなかった。退くに退けない気分だった。大きな肘掛け椅子に身体を力一杯押し付けた。このまま、身体が椅子のなかにのめり込んでいけばいいときえ思うのだった。

ふと、人の気配を感じた。閉めたはずのドアが僅か開く。隙間から目が覗き、男の顔が半分現れた。すぐ消えた。

しばらくすると、大きくドアが開いた。ドアの陰から、男と女が出てきた。

「あつ……」

息が詰まり、彼の目は丸くなった。一瞬、母木実子ではないかと思った。

ふたりは急いでドアを閉めると、何事もなかったように、彼の椅子の横を通り抜けていく。そしてドアからできるだけ離れるように、ロビーの端に近いところにある小さなテーブルのまえの肘掛け椅子に歩み寄り、向かい合つて腰を下ろす。

しばらく、彼はふたりの様子を窺っていた。だがふたりは黙つて座つて、しきりに肩で息をしているだけだった。

彼はふたりに躍り寄つて、血の気のない女の白い顔をもう一度じつと覗き込む。

「……………」

母木実子だった。彼は口を動かすが、声にならない。もう一度、繰り返す。口がぱくぱくするだけで、どうしても声にならない。

そのとき、靴音がした。大ホールの扉が開き、黒い服の男が出てきた。

彼は慌てて、壁のドアを少し開け、僅か隙間からなかへ潜り込んだ。

隙間から覗くと、肘掛け椅子の男と女のほうへ黒い服の男が向かつてくる。ふたりはお喋りしている風を装っているのか、素知らぬ振りをして、一心に口が動いている。

黒い服の男が男女のそばに寄り、身を屈めた。

彼はドアを閉め、隙間に耳を付けて耳を澄ます。

「ここにずっとおりましたか」

「ずっと居ましたよ。あなた方がどやどやと入ってくるまえからこの椅子に。ねえ、あなた……」

「うん……、ところで、なにか、あつたんですか」

「いや、別に……。怪しいものが忍び込んだらしいというんで調べているところです。では、結構です。お邪魔しました」

黒い服の男の去つていく足音がした。

隙間から覗くと、ふたりは去つていく男の後姿を目で追っていた。黒い服がホールのなかへ消えると、額を寄せてひそひそ話をはじめた。

ふたりはなにを話しているのか気になった。彼は思わず前のめりになつて、ドアを押してしまう。慌てて、ドアを引き、乗り出した身体を引っ込める。

突然、大きな足音が響いた。数人の黒い服がエントランスホールを駆け抜け、エントランスの扉に向かった。

彼は急いで後ずさりして、ドアを堅く閉ざした。ドアの隙間から射し込んでいた光線が遮断され、暗闇の世界となった。

彼は徐にドアから離れ、身体を回した。暗闇に身を任せ、彼はじつと目を凝らす。そのとき、一瞬、暗闇のなかに仄かな光を感じた。

彼は立ち尽くして、目が闇に慣れるのをじつと待った。いや、彼はこのまま暗闇がいつまでも晴れず、暗闇のままであればいいと思つていたので。

心臓が激しく打っている。死んだと思つていた母が生きていた。やはり、母はここにいたのだ。

だが彼は信じてことができなかつた。いま目のまえで起きたことはすべて架空の出来事のようにだった。暗闇が晴れば、すべてが雲散霧消してしまふにちがいない。

暗闇のなかに母木実子の血の気のない白い顔が浮かぶ。

突然、暗黒の暗闇のなかに、ぼやつと広がる仄かな小さな光が浮いて出た。母木実子の白い顔が仄かな小さな光になったのか。それとも仄かな小

小さな光が母なのか。彼は恐る恐る小さな仄かな光に近づいていく。

一步前へ進む。一步進めば、一步母木実子から遠のくのだ。だが彼は前に進むほかなかった。仄かな小さな光は次第に光度を増していく。背後に広がる暗黒世界に戻る気はしなかった。

仄かな光が次第に大きくなって、彼を包む。仄かな小さな光にはもはや母の面影はなかった。

彼はさらに前へ進む。仄かな光がさらに大きくなった。

光に近づいていくと、そこに大きな穴が口を開けている。よく見ると、下方（地下）へ連なる階段があった。光は階段の下から洩れているらしい。

彼は階段を下りていった。照明が点いた。自動的に点灯する仕掛か。

階段は折り曲がっていて、一〇段下りることに踊り場があった。そこから逆向きに一〇段下りると下の踊り場に出る。

九十九折のようにくねくねと折れ曲がった階段が地下深く連なっていた。

それは地下への秘密の非常階段のようだった。

一見、平屋のように見えた山荘風建物の地下に、何階分もある巨大な構造物が隠れされていたのだ。

彼は驚きとともに、大いに好奇心が刺激され、音をたてないように、そつと階段を下りていく。最初の踊り場だ。ドアが半開きになっている。そこからなかへ入る。

半開きのドアを押し下ろしたとき、彼はふと、母たちがこのドアを抜けて地上に出てきたのだろうかと思う。一瞬、母を愛しく感じる。だがもはや、母は母であつて、自分とは全く別の人格であり、別の存在だった。

ドアのまえを長い廊下が走っていた。そこは半地下構造で、一部が地面から露出しているらしく、天井に近い上部に横に長い光取りの窓が並んで

いる。仄かな光は半開きのドアから洩れていた光だったのだ。

廊下にはいくつものドアは並んでいる。奇妙なことに、どこにも全く人がいなかった。彼は端からドアを開き、なかを覗く。

最初のコーナーのドアを開けると、消毒薬の臭いがつんと鼻を突いた。

そのコーナーは医療関係なのか、卓上にディスプレイを置いただけの室、消毒薬の臭いが強くする手術室やさまざまな医療機器類がところ狭しと置いてある検査室、古びた実験台のうえにさまざまな機器類が雑然と置いてあるなんとなく寂れた感じの実験室などがづく。

反対のコーナーに移ると、空っぽのがつらんとした空室がつづく。とにかく、むやみに空室が多い。だが空室といつても、なににでも転用可能な感じだし、仕切りの壁も移動できるらしい。

その階は半地下構造ということもあつてか、なにひとつ秘密めいたものは見当たらなかつた。彼は早々に、急ぎ足でつぎの階へ下りていく。

踊り場のドアを開けた途端、機械油や重油の臭いに混じつて、接着剤や塗料などの揮発性の有機溶剤の臭いが襲ってきた。この階はさまざまな組み立てや修理修繕を行う工場のようなようだった。

彼は工場の中へ入っていく。夥しい数のさまざまな機械や装置がびつしり並んでいるのに、人影は全然ない。すべてが自動で、ロボットが操作するの。

一角には、他と嚴重に隔離されているブースがあつて、実験台のうえに研究開発用らしいさまざまな最新の実験用機器類が並んでいる。

なにかを作っているのか、液体の入ったフラスコがいくつも置いてあるが、彼にはなにを作っているのか、皆目分らない。どの機械も、どの装置も静止したままで動いていないのだ。

その階も素通りするように、急ぎ足で移動し、彼はその下の階へ移る。

ドアを開けると、回廊のある広大な空間が現れた。対面の彼方にさまざまな材料で作ってある人型的が並んでいる。単なる射撃の訓練場というよりも、新型銃器の試射場だろうか。

回廊を回って、彼はその下の階へ移る。

階段の踊り場から入ると、中央に大型トラックが優に通れるほどの幅広い長い廊下（道路）が一直線に走っていて、その両側に両開きの扉がいくつも並んでいる。扉には嚴重に施錠してあった。

彼は一つひとつ錠前を外し、扉の隙間から、なかを覗く。

そこには大量の物資が貯蔵されていた。化学肥料や殺虫剤、除草剤などの農薬やさまざまな合成化学物質の類だ。そのなかには抗生物質などの薬品や微生物を利用した有機農薬もある。

これらのさまざまな化学物質がなんのために大量備蓄しているのか分からない。だがこれらを用いて、生物兵器や化学兵器など特殊な大量殺戮化学兵器をつくり出そうと思えば容易に作れるのじゃないか。もともと殺虫剤などの農薬は戦争で使用されたことのある毒ガス用の化学物質を改良したものだ。それとも、ベトナムでの枯れ葉作戦のように、農薬そのものの大量空中散布を目論んでいるということか。

そのほかに、ヘリコプターや車などのさまざまな機器用の部品類が山と積み重ねられている部屋もあった。それに内容物は不明だが、梱包された大小の段ボール箱が無数に積み上げてあった。

とにかく、この階を縦横に走る幅広い廊下はこれらの物資の搬入搬入用道路で、この階の全体が物資貯蔵庫なのだろう。

「もしかしたら、この地下構造物は『黒』の秘密の兵器製造工場なのかも

しれないな。貯蔵庫の物資は製造工場の原材料ということか。やつらは一体、なんのためにこんなものを大量に備蓄しているのだろうか。われわれと闘うためのものか。それとも……」

彼は呆れ返り、口のなかで、呟く。

「そうか。一見、医療施設や実験室風に見えたところも、生物兵器や化学兵器の開発用のものだったのかもしれない」

ぶつぶつ呟きながら、一旦緩急あれば兵器輸送路になりかねない幅の広い長い廊下をどんどん歩いていく。この廊下（道路）は、多分、外へ直接通じているはずだ。

秘密施設の全容を知った以上、長居は無用だった。一端、「天の基地」へ帰って報告し、それからふたたび母たちの救済に来ることにしよう。

彼は周囲を観察しながら、出口を目指して進んでいく。

20

「おい、捕まえたか」

チーフの山城が黒い服の男に向かって吠える。

「どこにも見当たりません」

「なんだと。『天』の一味の若い男がいるはずだ。おい、識別装置はどこだ。それをもつて、付いて来い。出口は封鎖してあるな」

「はあ……」

この広い施設の出口をすべて封鎖するには、連れてきた人数じゃ少なすぎるのだ。大体、正面のエントランスのほかに、人間が出入りできる外へ

通じる箇所はいくつもあった。

宿泊用の各部屋の窓からも出入りしようと思えば不可能ではないのだ。だが部下の若い男は黙ってなにも言わず、命じられるままに、識別装置を担いでチーフの後に付いていく。

彼は黒い服の男たちが一度探し終えたところを再度探して回る。大ホールの隅々から宿泊用の部屋を一つひとつ、厨房、食料倉庫、トイレ、洗面所……、どこを探しても、怪しい男の姿はない。

「俺が来るまえに、お前たちが探したところはここだけか。残しているとこはほかにないか」

「ほかにですか……」

黒い服の若い男は怪訝な顔を向ける。

「うん……」

山城はこの若い男が建物にある地下の秘密施設の存在を知らないことに気付いて、曖昧に応える。「黒の組織」のなかでも、地下の秘密施設はごく少数の者にしか知らされていないのだ。

「ところで、あのふたりはどこにいる？」

彼は話題を変える。

「あのふたり……」

「そうだ。例の一軒家の……」

「あ、あの夫婦のことですか。さつき、ロビーで見掛けましたが……。まだ、いるかもしれません」

「ロビーだな」

彼は踵を返し、ロビーへ向かう。

ロビーには人影がなかった。

「チーフがお出でなるまで、ふたりは一番端の椅子に腰を下ろしてしまいたが……」

彼は急いで座っていたという椅子に近寄ると、椅子の表面を掌で触れる。まだ温もりがあった。

「おい、あのふたりを探すんだ。このなかになければ外を探すのだ。屋内と屋外とに分かれて探せ。そして身柄を確保するのだ。決して、逃がすな。いいな。早く、みんなを集める」

若い男は走って姿を消した。彼は携帯電話を取り出し、立ったまま、彼のオフィスにいる遠隔操作で施設の監視している男を呼び出す。

「例の一軒家のふたりのことだ。まだ、Kキャンプの施設に居座っていると言っていたな。ついでしたがたまで、ここに居たらしいが、どこかへ行ってしまったのか、姿がないのだ。外へ出ていったのに気付かなかったか」

「ええ、いませんか……」

「いま、ふたりがどこにいるか調べてくれ。ここで待っているから、折り返し連絡してくれ」

彼は一方的に言う、ロビーの大きな椅子にどかんと腰を落とした。

「天の組織」の若い男は一軒家のふたりを探しにきたにちがいない。だから、一軒家のふたりを探せば、怪しい男は見つかるはずだ。これは確信に近かった。

たとえ、「天の組織」からの男の導かれて、ふたりが逃げ出したとしても、椅子の温もり具合からみて、まだ遠くには行っていないだろう。

若い男を先頭に、エントランスホールに黒い服の男たちが集り出した。

「これで全員です」

「まず、外から探そう。手分けして、ふたりを探せ。この周りを散策して

いるかもしれないし、あるいは高飛びしようとしているかもしれない。とにかく、捕まえるのだ。逃がすな」

黒い服が散つていく。彼は椅子でオフィスからの連絡を待つ。

「天の組織」からの男はどこへ行ったのか。もうここにはいないのか。すでにふたりと会い、行動をとりにしているのだろうか。

「チーフ、ふたりを掴まえることができません。なぜか、電波が弱くて……。どうしたんでしょうか」

オフィスの男だった。

ふたりの体内に埋め込んだ発信機から発する電波を捉えることができないらしい。ということは、居場所はどこだ。電波を妨害するものがある場所はどこだ。

「それで建物に侵入した怪しい男のことは分からないかね。そのやつの動静だ。いまだここにいるのか。もう施設の外へ出てしまったのか」

「まだ施設の外へは出ていないようですが……」

「そうか。なにか分かったら連絡してくれ」

携帯電話を仕舞おうとしたとき、ふと、彼は壁を見た。そして隠されているドアがあることに気付いた。

「そうか。そうだったのか」

山城はにんまり笑みを浮かべると、徐に、椅子から立ち上がった。

第三章

21

「どうしたんだろ。ヘンだなあ」

「なにが……」

木実子はちらつと運転席の森野を見ただけで、ふたたび視線を前方へ移す。白い顔に幾分血の気が戻ってきたのか、頬がほんのりピンクがかって見える。

太めの身体の男を先頭に、黒い服の男たちが急ぎ足でエントランスホールを横切り、大ホールへ消えると、ふたりはすぐ外へ出た。扉の前の車寄せに外国製の大型セダンが乗り捨ててあった。ドアを施錠せず、キーは差したままだ。ふたりは乗り込むと、そのまま施設のあるKキャンプを抜けたのだった。

「カーナビがおかしい。妨害電波かな」

なぜか、森野がハンドルを切ったり、身体を動かすと、それに反応するように画面が激しく乱れるのだ。

「この道は……」

「さあ……。直進したら……」

「後ろは大丈夫か。追いかけてくる車はないか。追跡をかわすために、曲がったほうがいいかな……」

「そおうね。カーナビ、どうしたのかしら」

彼女はフロントガラスを見つめたままだ。

「……………」

「なにかヘンね、この車は……」

「うん、早く、乗り捨てたほうがいいかもしれない。この車に盗難防止のための発信機がついているのかもしれない。その電波が妨害していてカーナビが効かないんだろ」

彼らが車を奪われたことを知ったら、電波を追ってすぐ追跡をはじめたろう。

「電波？ それじゃ、すぐ見つかるわね。発信機のスイッチはどこ。早く、切ってしまわなくちゃ……」

「どこにあるんだろう……」

「早く見付けて……」

一瞬、地下で見た光景が一段と鮮明になって脳裏に甦ってきた。

彼女は何度も激しく頭を振り、なんとか払い落とそうとするが、脳裏に焼き付いてしまったのか、いくら頭を振っても払い落ちることはなかった。

ふたりが居座りつづけていた施設からそろそろ退散しようと考えていた矢先、偶然、彼女が秘密の扉に気付いたのだった。それから、ふたりの冒険がはじまったのだ。

一軒家から拉致されて以来、いくら考えても、黒い服の連中が誰なのか、そしてなにを考えているのか、全然分からなかった。大体、なぜ、拉致されたのかさえ、ふたりには理解できなかった。

それに何日も、広大な施設に放置されたままだった。別に、拘束されることもなく、広大な施設で自由に振舞ってよかった。もうどこへ行っても構わないと言われたが、ふたりにはどこへ行く当てはなかった。そしてそのまま居座りつづけていたのだ。

だが地下の秘密を知って、安閑としておれなくなったのだ。かといって、行く当てはない。盗んだ車で逃げたものの、今度は追われる身になってしまった。

秘密の扉を開けたとしても、逃げ出さずに居座りつづけるべきであった。そうすれば、もっと面白いことに出つくわすかもしれないのだ。

彼女は悔いた。

車を盗んで逃げ出した以上、今更、逃げたことを後悔してもはじまらないではないか。追手がもうすぐ現れるぞ。くよくよしてどうするんだ。

彼女は自分で自分のことを激しく叱る。

だが地図もなく、カーナビもない。いくら高性能の車でも、これでは手も足もないも同然だった。

遠くからヘリコプターの爆音が近づいてくる。

「森のなかへ入るのよ」

「OK」

車は大きくハンドルを切る。

「電波は……」

森に隠れても、車から電波が出ていれば、丸裸同然だ。

「発信機はどこだ……、でもおかしい」

「なにが……」

「ほら、見てごらん」

森野は自分の身体をカーナビに近付ける。画面が激しく流れる。

「どうということ……」

「電波が出ているらしい。きみもやってごらん」

彼女も恐る恐るカーナビに身体を寄せる。画面が激しく流れた。

「やはり、そうだ」

「えっ、ホント？」

「やつらはわれわれの身体に発信機を埋め込んだんだ。だから、われわれを自由勝手に振舞わせていたのか……」

「えっ、そんなこと……」

「施設に連れてこられた最初の日と、しばらくしてからもう一度、手術室のような処置室に連れ込まれたね。そこでベッドに括りつけられて、注射されたり、点滴されたりしただろう。そのとき、やつらが細工をしたのだ。左肩辺りに、固いしこりがあるだろう。それだよ」

「これが発信機なの……」

彼女は首の付け根から右手を差し込んで、指先で左の肩の周りをしきりにいじくっている。

「これでは木の陰に隠れても、車を乗り捨てて逃げ出しても、手を振って合図をしているようなもんだな。全く……」

森野の声に自嘲的な響きがあった。彼女はじつと森野を見る。だが彼女の目には施設の地下一階で見た病院の診療室や手術室といったような光景がくつきり写り出されていた。

「うう……」

彼女は知らずに、うめき声を発した。その地下一階の一室で、いつの間にか、有無を言わせず、黒い服の連中に左肩が切り割かれ、体内深く小型の発信機を埋め込まれてしまったのか。

木の間からヘリコプターの機影が見えた。爆音が頭上に迫ってきた。

「アムン、耀が『黒』に捕まってしまったようです。救助に行きたいのですが……」

「ミサ、なんだって……」

未佐が一部始終を話す。話し終わるのを待って、アムンは彼女の脇に立っているハクリに目を移す。アムンにはどこか腑に落ちないところがあるらしい。

「ヨウがやつらにやすやすと捕まることはないと思いますが、大分時間が経っているので心配なのでしょう」

ハクリは未佐に目をやりながら、アムンに伝える。彼女は他人事のように突き放す言い方をするハクリを恨めしそうな目をして見つめる。

「ヨウが行ったところは連中の本拠地かね。それとも……。『黒』は世界各地に拠点となるキャンプをいくつも保持している。もちろん、日本にもいくつかあるはずだ。かといって、そんなところにヨウの母たち（一軒家のふたり）を連れ込むだろうか。そして長期にわたり、監禁して置くものだろうか。それほど、あのふたりが『黒』にとって重要人物なのか。わたしにはそうは思えないのだが……」

「でも、耀ちゃんが……」

彼女にはいつまでたつても耀は幼子だった。

「もし、そんなところにふたりがいたのなら、極めて特殊な事情によるものだろう」

「特殊な事情……」

「そう。もしかしたら、『黒』の内部でもふたりのことは秘密扱いになっ

ているのかもしれない。とすれば……」

「だから、心配なのです。内部でも秘密になっているのなら、ふたりのことを秘密裏に処刑してしまおうとする可能性も大いにあるからです」

「うむ、そうとも考えられることだろうか……」

「そうに違いはないわ。内部でも秘密扱いなのよ、きつと」

彼女はそばに佇んでいるハクリに顔を向け、目を剥く。彼女は気がでないのだ。

「どう考えるかね」

アムンもつられるように、ハクリに目を向ける。

「ヨウと連絡が取れないのはなぜか。施設はかなり奥まで潜入しているからなのか、それとも敵に捕らわれているからなのか……」

「ヨウが連中に簡単に捕まるかね」

アムンは「ハクリがやすやす捕まるようなことはない」と言っていたことを思い浮かべ、じつとハクリの目を覗き込む。

「そうですね。ヨウは大きく成長しましたから、そうやすやすと敵に捕まるようなことはないでしょう。でも自ら『黒』のなかに乗り込んで、やつらと『一体同化』しようなんて考えているんですから、少々無謀すぎると思いませんか」

「ふむ……」

「敵と一体同化するまえに、ヨウを連れ戻すことができれば、そうすべきではないでしょうか」

「わたしが参ります。耀ちゃんを連れ戻します」

彼女はここぞとばかり、アムンに訴える。

「ヨウはもう幼い子ではない。ミサに助け出すことができるかな。ハクリ

も一緒に行きなさい。ただし、例のふたりを見つけたら、ふたりの救出を優先にすることだ。なんとしても、ふたりを助け出すのだ。いいね」

アムンは立ち上がると、未佐とハクリを執務室の外まで見送った。

23

「チーフ、車を発見しました。ふたりはなかにいる模様です。ふた리를捕まえたら、戻ります」

「一切、危害を加えてはならん。生け捕りするんだ」

「了解」

木実子たちを追跡していたヘリコプターからの報告だった。山城は車がなくなっていることに気づき、即座にヘリコプターによる追跡を命じたのだ。

彼は満足そうな笑みを浮かべ、椅子から立ち上がると、窓辺に寄り、小さな高窓から空を仰いだ。白い雲が浮かぶ小さな空が見える。彼は近づいてくるヘリコプターの爆音を思い浮かべた。

司令室は半地下構造の地下一階にある。その一角に、彼の机が置いてあった。

室内には彼のほか誰もいない。明かり取りの開かずの高窓には分厚い防弾ガラスが填めてあり、外部からの音も遮断されている。室内には彼の息遣いのほか音はなく、静寂そのものだった。

白い雲がやがて灰色がかつた雲に変わり、小さな窓一杯に広がっていく。追い出そうとしても居座りつつづけていたふたりが、なぜ、急に逃げ出す

気になったのだろうか。やはり、訪ねてきた男に会ったからなのか。それとも、なにかを嗅ぎ付けたからか。

もし、ふたりがああ男に会って逃げ出したのなら、男も一緒かもしれない。それならまだいい。

彼はロビーの椅子に腰を下ろしているとき、地下への秘密の扉を見て、ふたりと「天の組織」からの男が地下に逃げ込み、つきり、久しぶりの再会を楽しんでいるにちがいないと思った。

モニタリング担当者がふたりや怪しい男の動静を捉えることができずにいるのも、地下なら発信機の電波も弱まるはずだし、それに、地下は監視システムの対象外だからにちがいないと思いついて入っていたのだ。

だが彼の予測が大きく狂い、地下はもぬけの殻だった。どこにも彼らの姿はなかったのだ。

彼は窓を塞いだ灰色の雲を見ながら、じっと考え込む。

やはり、ふたりは地下の秘密を知ったにちがいない。もし秘密の地下の存在に気づき、全貌を知ったとしたら、生かしておくわけにはいかない。秘密の地下のことが外部に洩れたことが知れば、ふたりを無断で拉致したことも、施設内に匿っていたことも、あらためて問われることになるだろう。

「俺もこれで終わりか」

ふたりが連行されて来たら、即刻、消してしまおう。そして一切を闇に葬るのだ。これ以外、残された道はない。

彼は窓辺から離れ、机に戻り、大きく息を吐いた。

「いま戻りました……」

「あ、ヨウか……」

アムンは執務机から目を上げる。

「実は……」

彼はKキャンプの施設やそこでの出来事について一部始終を報告する。

アムンは一切口を挟まず、耳を澄まして聞いていた。そして報告が終わっても、なぜか口を開こうとしないので、じつとヨウの目を見つめている。

「なにかあったのですか……」

いつもなら直ぐ飛んでくるはずの未佐の姿がいくら探しても見当たらない。それにハクリもいないらしい。

「ああ、ミサとハクリはヨウを探しに出掛けたところだよ。それにヨウのお母さんの救出も兼ねてね。でも、お母さんを見付けておきながら、ヨウはどうして助け出そうとしなかったのかね」

「実は、自分にも分からないのです。目の前に母らしいひとが椅子に座っていたのですが、そのときは、なぜか一瞬躊躇して、声をかけて確かめる気さえ起こらなかった。そこへ敵が現れ、それきりになってしまったのです。なぜそうなったのか、自分でも不思議で、腑に落ちないのですが……」

彼は恨めしそうな目をしながら、正直に応える。相手のこのころの内が透けて見えるアムンには隠し事は通用しないのだ。

「もう一度探そうとしなかった……」

「はい」

「どうして……」

「……………」

なぜもう一度探す気が起きなかったのか、彼にも分からないのだ。かといつて、母のことを忘れていたわけではない。ずっと気になっていた。

「お母さんに連れ添っているひとがいなかったの、男のひとが……」

「ううん……、ひとりの男のひとがおりました」

「……………」

アムンは黙って軽く頷き、ヨウをじつと見つめる。

アムンの視線が彼のところに突き刺さる。胸のなかでなかがぐるぐる回り出す。いくら止めようとしても止まらない。そしてますます勢いよく回り出すのだ。

彼は一目見ただけで、母のそばにいる男がいつも一緒にいる森野であることは分かっていた。だが母のそばに男がいるだけで、母に対してなぜか素直になれないのだ。素直になれない気持ちだが、彼に一瞬の躊躇を呼び起こしたにちがいない。

これは自分が母からまだ完全に自立できていないからなのだろうか。自分の出自を乗り越えて、自立を勝ち取ったと思っていたが、そうではなかったのか。

彼のこのころのなかで、母はいつも輝いていた。だがいつからか、母は薄暗い影となって、輝かなくなつた。そばに男の影があつた。彼はなんとかして母に輝きを取り戻して欲しかった。もう一度輝く母を見たかった。彼は何度も男の影を取り払おうとした。だが何度やってもダメだった。

「もう、いいのです。母は母ですから……」

彼は思わず、声を出した。

「そうだね」

アムンは静かに微笑んだ。

「アムン、これからKキャンプの施設へ行ってみます」

「そうか。気をつけるんだ。敵を侮ってはならんぞ」

耀は翔る。アムンは立ち上がった、二、三歩後を追う。

ヨウの後姿が次第に小さくなつていく。アムンはいつまでもじつと佇み、ヨウの消えた空を見つめていた。

25

「ハクリ、あのヘリコプターは『黒』のじゃないかしら」

「ミサ、後をつけてみるか。なにかを探しているらしいな」

小型のヘリコプターがバリバリと無遠慮に爆音をたてて、森の樹木すれすれに低空飛行をつづける。地上を這い回るとんな獲物を探しているのだろうか。

「前方に、車が……。ああ……。木実子さんと森野さんらしいわ」

未佐が叫んだ。

「ミサ、あのふたりに間違いないか」

「間違いないわ、ハクリ。ヘリコプターが車に近付くまえに、ふたりを助け出す方法はないかしら。とにかく、ふたりに追跡ヘリのことを知らせなくちゃ。わたしが行ってくる。ここで待っていて」

彼女は急降下して車に追い付く。窓の隙間から車内に侵入し、木実子の肩に乗る。どうしたわけか、ムズムズする。それを嫌って、木実子の体内に潜る。一体同化だ。

「木実子さん、敵のヘリコプターよ。早く逃げて」

「誰なの、あなたは……。あ、未佐ね。逃げても直ぐ見つかるの。身体のなかに発信機が埋め込まれているのよ。だから、もうダメ……」

木実子は一瞬、警戒して身体を強ばらせたが、直ぐ、一軒家で未佐が一体同化してきたときの感触を思い出したらしい。

「そんなこと、言わないで……」

さっきのムズムズが発信機が発する電波だったのか。どうする。どうすればいいのか。ヘリコプターの爆音が間近に迫ってきた。

車は大きな樹木の下に入ると、車は停まった。

早く、つぎの手を考えるんだ。彼女は自分に檄を飛ばす。だが空回りするだけなのか、頭は軋み、真つ白になっていく。

「ヘリコプターが着地したら、ヘリに向かって突進するのよ。そして体当たりして全速力で逃げるのよ」

彼女はわけの分からないことを口早に叫ぶ。

そのとき、頭上のヘリコプターからロープが落ちてきた。つづいて、黒シャツの男がロープを伝って下りてきて、車のボンネットに立った。

「早く、発車するのよ」

彼女は叫ぶ。だがハンドルを握っている森野には聞こえないのか、ハンドルを握ったまま、微動だにしない。

いつの間近づいてきたのか、三台の車が突然現れ、木実子の車を取り囲む。先頭の車から一人の黒い服の男が降りてきた。木実子の車のドアをこじ開けると、ふたりを後部座席に移し、男は運転席に乗り込む。

ボンネットの男はするとロープを上つていく。ほどなく、ヘリコプターは爆音を残して去っていった。

先頭の車が動き出す。ふたりを乗せた車が後を追う。その後に残りのもう一台の車がつづく。

一瞬の出来事だった。

26

「ハクリ、なんでここに……」

煙突のそばにハクリの姿を見付け、耀が走り寄る。彼は「黒」の施設である山荘風建物の屋根に降り立ったところだった。

「ああ、ヨウじゃないか。なんの連絡もないので、心配して来たんだ。なにしているのかね、ここで……」

「連絡なくてゴメン。いま、『天の基地』から戻ってきたばかりだけど、これから建物のなかに入って、母たちを探して来ようかと思つて……。ところで、未佐さんも一緒だと聞いたけど……」

耀はアムンに会つて、報告してきた旨を話す。

「そうだったのか。一足違いだったな。実は、ここに来る途中で、車で逃亡中のヨウのお母さんたちを見付けたんだ。それでミサは早速ふたりに会いにいったんだが、生憎追跡してきた『黒』の連中に出つ食わし、ふたりが捕らえられてしまった。そのときに、ミサも一緒に捕まつてしまったんだ……」

ハクリは煙突の縁に腰を下ろし、途中での出来事の一部始終を話した。「一体同化？ 未佐さんが母の身体に入つたままなの。いつでもぬけ出せるんでしょ。それなのになぜ、未佐さんは『黒』に捕まつたままにいるの

かな。早くぬけ出たほうがいいと思うけど……」

耀はハクリをじつと見つめる。

「ふたりがどこへ連れていかれるか知りたいんじゃないのかね」

「ふむ、なるほど。でも危険だなあ。『黒』はなにをやるか分からない」

ヘリコプターの爆音が近づいてくる。

「戻ってきたか。ミサたちもそろそろやつてくるぞ」

「ハクリ、ここには秘密の地下があるからね……」

耀は建物の間取りや構造を説明する。

「分かった。わたしはここでミサたちを乗せた車がどこへ行くか、見張っている。ヨウは建物のなかで待つていて、ふたりが連れ込まれてきたら、その後をつけ、建物のどこへ連れていかれるかを探るんだ。いいね」

「了解」

彼は煙突から建物の内部へ入っていく。

27

「チーフ、着きました。エントランスのテラスのまえにいます」

「いま、行く。ふたりは車に乗せたままにして、そこで待つていてくれ」

山城は携帯電話をポケットに挿し込みながら、急いで地下の司令室からエントランスへ上がつて行く。ふたりをここに連行させるよりも、多少面倒でも、自分から地上のエントランスに出て、部下には地下の秘密を隠しておくほうが都合だと判断したのだった。

彼はふたりを地下三階の試射場で処刑するつもりでいた。ふたりの後始

末が済むまでは、秘密の地下の存在を知っている者とも言えども、一人も近づけたくなかった。

彼はヘリコプターが帰ってくるまでに、地下に籠って、計画を綿密に練っていた。地下三階で処刑したふたりの遺体を地下二階にある実験用電気炉で焼却する予定だったが、ひとつ難問があった。

それはふたりを処刑するまえに「天」から来た男を誘い出し、会いにきたところを女と一緒に写真撮影しておきたいのだが、問題はどうかやつて男を誘き出すかだった。単に、地下の秘密を知ったということ、ふたりを処刑するだけなら、簡単だった。それだけなら、地下三階の試射場で処刑する必要はないし、箝口令を布いて、部下に手伝わせてもいい。

だが今回は「天」からの男の写真を撮るか、捕縛するという目的があった。むしろこつちのほうの主目的といってよい。これを達成できれば、ふたりを処刑せずに、監禁しておくだけで済ませることもできるかもしれないのだ。

地下から地上へは秘密の階段のほかに、煙突のなかに隠されて設置されている小型のエレベーターがある。

彼は決断できないまま、一階でエレベーターから降り、大ホールを横切り、エントランスホールへ入っていく。

「チーフ、こちらです」

彼を待つていた黒い服の若い男が走り寄る。

「ふたりは……」

「あそこに停めてある車のなかです。手足を縛ってあります」

「まず、目隠ししろ。手足を縛ったままにして、一〇〇一号室に放り込め」

車を一瞥し、彼は命じる。一〇〇一号室は南東の角にある一番端の宿泊

用部屋だ。地下への秘密階段が一番近いところにあった。

「一〇〇一号室ですか」

「うん、とりあえず……。別の場所へ後で移動する」

「はい」

黒い服の男たちがふたりを車から引き出し、肩に担いで運んでいく。ふたりは意識を失っているのか、それとも、観念しきってしまったのか、腕をだらりと下げ、担がれたままだ。

一瞬、空気の乱れを感じた。彼は一心に周りを見回す。「天」の男にちがいない。ふたりが運ばれていく様子を見守っているのだ。

「識別装置はないか。早く、持つてくるんだ」

彼は近くの男に命じる。

透明体識別装置が運ばれてきた。だがすでに空気の乱れは消えていた。彼は装置をもって一〇〇一号室へ急ぐ。

目隠しされ、手足を縛られた男と女がベッドのうえに無造作に投げ出されているだけだった。なにも変わったことはなかった。「天」の男の姿もないし、他の透明体も捉えることはできなかった。

彼はじつとふたりを見る。丸太のように横たわるふたりに目を向けたまま、「天」の男がつぎにどんな行動を取るだろうかと思った。だがなにも浮かばなかった。

この建物のなかにきつといる「天」の男をどうやつて誘き出すか。一度はふたりを射撃の的にして「天」の男を誘き出そうと考えたが、男が現れるまで銃を構えているなんて、余りにも芸がなさ過ぎる。もつと簡潔な方法はないか。

彼は「天」の男がふたりを助け出そうとそばに近づいてきたところを写

真に撮りたかった。なんとかして「天」の男とその母親らしい女と一緒に写っている写真を撮るのだ。

あのとき、地区代表はなぜか「天」の男の写真に強い執着を示していた。だがとうとう写真に撮ることはできなかった。そして男が死んだことを知ると直ぐ手を引いてしまったが、もし、この男とその母親らしき女の一緒に写真があれば、地区代表は喉から手が出るほど欲しがりにちがいないのだ。

かといって、写真が撮れたとしても、彼は直ちに地区代表に手渡すつもりはなかった。彼は地区代表がなぜその写真を欲しがるのか、その理由を知りたかった。誰にも知らせることのできない深いわけがありそうに思えてならなかった。

地区代表の誰にも知られたくない秘密を探る千載一遇のチャンスが目の前に訪れようとしているのだ。

彼はこのチャンスを誰の手も借りずにやっつてのけようとこころに決めていた。別に気負っているわけではなかった。ただ、秘密が洩れることを極度に恐れただけだった。

なにかいい方法はないか。いろいろ考えた末、誰にもなにをやっているのかを悟られずに、もつとも安易で失敗の少ない方法として、囹のふたりを入れた檻を試射場の真ん中に置き、周囲を透明体識別装置付センサーカメラで監視する案に落ち着いたのだった。センサーカメラ類を人目につかないように設置さえすれば、ふたりを入れた檻が誰かに見られたとしても、そう不審がられることはないだろう。

彼は自分の案に満足し、すぐ実行に移していく。だが棒杭に括りつけの檻は論外としても、やはり柵のある檻もまずい。彼は途中で考え直して、檻

を止めてガラス張りに変える。

檻に代わるガラス張りの簡易な牢屋であれば、たとえいまのうちに試射場の真ん中に作っても、誰かに見られても言い訳はつく。ふたりをここへ移すのは、夜になってからでいい。そして人目の付かないところに透明体識別装置付きセンサーカメラを設置するのだ。

これも「天」の男の写真を撮るまでの間だ。彼はその間、地下には誰も近づけるつもりはなかったが、「念には念を入れよ」だったのだ。

ふと、ふたりに前もって処置しておくことを忘れていたことに気付く、彼は急いで一〇〇一号室へ引き返す。逃げられたときの用心に、ふたりの記憶を消却しておかなければならなかったのだ。

彼は注射器を取り出し、ベッドに横たわっているふたりの鼻腔から最新の記憶消却剤を注入する。これは「黒の集団」が密かに開発した新しい記憶忘却薬で、新しい記憶を消すのに極めて有効な合成化学物質であった。ただ難点は、特に重い副作用が出る可能性があることだった。

しばらく、彼はふたりの様子を窺っていたが、ふたりはまるで死んだように動かない。いささか気になって、彼は目隠しを取り、目蓋を開き、瞳孔を覗く。生きていることを確かめると、ふたたび目隠しをする。

それから、彼はもう一度牢屋をチェックしておこうと考え、太めの身体を揺るようにして、急ぎ足で非常階段を下り、試射場へ向かう。

28

「ハクリ、ふたりは一〇〇一号室に連れ込まれました……」

耀はハクリに報告する。ハクリは身を隠すように煙突のレンガ壁に背中を付け、屋根に腰を下ろして待っていた。彼は身体を折って、ハクリの隣に座る。

「一〇〇一号室か……」

「ええ、一階の宿泊用の部屋で、南西の角にあります。現在はそこに監禁されていますが、これは一時的で、多分、今夜にもどこかへ移すつもりでしょう」

「うむ、そうか。それで、ふたりはどんな様子だったかね。ミサからなんの連絡もないのだが……」

「ふたりとも目隠しされ、黒い服の男たちに担がれて一〇〇一号室へ運ばれていきました。でも、意識がないのか、頭を下げ、両腕をだらりとぶら下げていましたが……」

「ふたりともそんな状態だったのか。それじゃ、ミサはヨウに気付かなかつたな」

「母が意識のない状態では、一体同化している未佐さんはどうなるのですか……」

「一時的な意識不明なら問題はないが……」

「意識がない状態が長期にわたる場合は……」

「脱出が困難になることもある。脱出に特殊な技術が必要なのだ」

「もし、意識が戻っていないければ、未佐さんが一体同化したままの状態であたりを救出することにはましようか」

「そうするほかないか……」

ハクリは天を仰ぐ。

「母の意識が戻れば、未佐さんはすぐ脱出できるのですね」

彼はしばらくハクリの様子を窺っていたが、我慢できず、口を開く。

「うん……」

「じゃ、そのときまで待ちましようか……」

「うん。しばらく、ふたりの様子を見ることにしよう。ヨウはいつでもふたりが移動させられるか、それを探ってくれ。そのときの様子で、どのような方法でいつ救出するかを考えよう」

「はい、分かりました」

「やつらは透明体識別装置を持っているから、注意するのだ。ふたりが意識を取り戻しているようなら、すぐ知らせるように」

耀はハクリに合図をして、煙突のなかへ入っていく。ハクリは立ち上がり、じつと彼の後姿を見守った。

29

山城は執務机でじつと夜を待った。準備は万端整っているはずだ。簡易牢屋も死刑囚の独房並みに整えてある。だが彼にはひとつの懸念があった。

それは「天」の男がふたりに会いに必ずやつて来るとはかぎらないことだ。土台、男がこの建物に秘密の地下があることに気付いているか分からないのだ。もし、気付いているとしても、まして深い地下の三階にある試験場に牢屋を設置していることには気付かないかもしれない。

彼は効率良く仕事を終えたかった。秘密を守るには、短時間で仕事を片付けることが肝要なのだ。だからだと「天」の男を待つようなことはしなかつた。もし二日にわたるようなことになったら、人知れずふたりを

処刑することは無理だろうし、秘密を保つことすら難しいにちがいない。

とにかく、これまでの秘密を保つためにも、ふたりを牢屋へ移したその夜に、間隙を入れずに、「天」の男がやってきてくれれば申し分ない。そして写真を撮ることができればいいのだ。だが果たしてそう都合にことが運ぶか。

彼はなんとかしてそうしたかった。一刻でも遅ければ、邪魔が入るような気がしてならなかった。

彼はいろいろな案を考え、頭のなかで一つひとつシミュレーションをやってみる。そしてとうとうふたりを地下三階の牢屋に移すことを事前に「天」の男に感付かせておこうと思った。そうすることが一番効率的なのだ。だがそれは極めて大きな危険が伴うことでもあった。

窓越しに空を見る。日が傾き、辺りは陰り出している。秋は日暮れが早い。もうすぐ闇がやってくる。彼は徐に立ち上がった。

一〇〇一号室の前に立つと、彼はドアを大きく開けた。

ベッドのうえに、ほぼ前と同じような姿勢で、ふたりは横たわっている。彼は妙なときめきを感じた。その途端、なんとも言えぬ不安を覚えた。

殊更、彼はゆっくりふたりに近づいていく。そしてそつと自分の頬を女と男のふたりの口元に近付ける。女にも男にも微かな息遣いがあった。

彼は大きく息を吐く。そして今度は女と男を激しく揺する。何度揺すってもふたりは目を覚まさない。

しばらく、彼は棒立ちになつて、じつとふたりを見下ろしていた。

室内の隅々に闇が漂い出している。闇はすぐ一面に広がっていくだろう。

彼はようやくわれに返って、照明のスイッチに手を伸ばす。一瞬、躊躇し、急いで手を引つ込める。ドアが開放したままだ。

もう一度、ベッドのうえのふたりに目を向ける。彼はふたりを目隠ししたまま歩かせて、非常階段を通って地下三階の牢屋まで連れていくつもりでいた。だが記憶消却薬の副作用なのか、まだふたりには意識が戻っていないのだ。

かといって、一緒にふたりを担いで地下三階まで非常階段を降りていくことは、たとえ力持ちの彼でも無理だ。ひとりずつ担いで降りるほかないのか。

彼は棒立ちのまま、一方でなにかいい方法がないかと探りながら、ふたりを一緒に担いで階段を降りる自分を頭のなかで思い描いてみる。

地下三階を二度往復するとなれば、急いでも、数分はかかる。試射場のフィールドに下りて牢屋に運ぶとなれば、さらに数分が必要だ。

その間、照明はどうするか。部屋を照明なしで、暗いままにしておけば、怪しまれそうだし、かといって、明々と照明を付けておけば、いかにもわざとらしい。

とうとう、彼はこのまま照明を点さず、作業を始めることにしたのだつた。

だが作業を始めると、予定していたふたり一緒に運ぶ作業計画が当初から破綻してしまい、ひとりずつ担いで運ぶほかなかった。彼は迷いながら、男と女を別々に、ひとりずつ試射場への移動を始めた。

30

耀は煙突から建物のなかへ入ると、すぐ一〇〇一号室へ向い、まだふた

りがいることを確かめる。そしてドアの隙間から母に近づき、身体にそつと手を添え、体温を確かめる。柔らかい温るみが伝ってくる。胸に耳を近づける。母の匂いとともに、微かにゆつたりした鼓動が聞こえた。彼は激しく肩を揺する。

「ママ……」

目を開けない。どうしたのか。運び込まれたときから、ずっと眠ったままなのか。なぜか。

不安が過る。このまま、息が絶え、心臓が停まってしまうのではないか。一体同化しているはずの未佐はどうしているのか。彼女も母と同じように、意識不明の状態にあるのだろうか。

「未佐さん……」

彼は母の耳に口を近づけ、小声で何度も呼ぶ。だが全くなんの反応もない。未佐も母と一緒に意識を失ってしまったのか。それとも、すでに母との一体同化から離れて脱出しているのだろうか。

それにしても、いつまでふたりをここに置いておくつもりだろうか。このまま、目隠しされ、手足が縛られて何日も放置されておれば、いずれふたりは死んでしまうにちがいない。

でも、目隠ししたままにしてあるところをみると、どこかへ移すつもりなのか。ここに監禁するつもりなら、ドアには錠を下ろし、窓には逃亡防止のために頑丈な鉄格子を設置しなければならないはずだ。

一瞬、彼はふたりを連れ出すなら、いまのうちだと思った。

意識不明のままのふたりをこの部屋から外へ運び出すことができないだろうか。彼は辺りを見回す。大きな窓が二つあった。レースのカーテンが引いてあるが、鉄格子はない。

一度、ハクリのところに戻って、相談しようかと思った。

身を翻そうとしたとき、ふと、彼は疑念を覚える。

ふたりは目隠しされ手足が縛られて自由がきかないとはいえ、一〇〇一号室のドアはなぜ施錠されていなかったのか。部屋の南側と東側の二面にある窓の開閉も自由自在の状態にあるではないか。これではこの建物に潜んでいるわれわれに「どうぞ、連れ出して下さい」と救出を誘っているようではないか。なぜか。畏か。

そのとき、廊下に微かな足音がした。近づいてくる。彼は急いでベッドの下へ潜り込む。

ドアが開いた。靴がベッドに近づいてきた。

彼は下から覗く。太めの黒い服の男だ。男が透明体識別装置を持っていないことを確かめると、彼はベッドの下から抜け出し、廊下へ出る。そして振り返り、ドアの隙間からなかを覗く。

男はふたりの様子を窺っている。ふたりを交互に激しく揺する。意識のないふたりの目を覚まそうとしているのか。意識が戻らなければ、どうする気なのか。彼はじつと男の様子を窺っていた。

彼は廊下の片隅で身を屈め、男がふたりを連れ出すのをじつと待った。

もしふたりを一〇〇一号室からどこかへ移動するつもりなら、そのための牢屋か、それなりの監禁場所をすでに用意しているにちがいない。それはどこだ。それはどこにあるのか。

どうしたわけか、ふたりの意識はなかなか戻りそうにないらしい。彼は業を煮やして、男がふたりを担ぎ出すのをここで待っているよりも、事前にふたりを監禁する場所を確かめておきたいと思い、立ち上がる。彼にはひとつの目算があった。そのために早め早めに手を打っておきたいのだ。

彼は建物の全容を思い浮かべ、それらしいところを探す。地上にはそれに適したところは見当たらない。地下だ。地下のどこだ。彼は非常階段を下りていく。

地下一階、ここは半地下だった。だとすると、人目に付き易いので、牢屋（牢獄）には不向きか。

地下二階、ここにはいろいろな機械や装置が並んでいる。となると、人の出入りが多いか。では地下三階の試射場か。

「なんだ、あそこにあるのは……」

彼の目が丸くなった。

試射場の奥の方に若干寄せて、一見、ガラス箱のような建屋ができていたのだ。近づいてよく見ると、簡易壁をつなぎ合わせた小さなワンルームの箱型住居のようで、前面一面がガラス張りだった。

「ここにふたりを閉じ込めて、常時監視しようというのか……」

それにしても、なぜ、前面がガラス張りなのか、彼には見当つかなかった。一瞬、彼はガラス箱に閉じ込められたときのことを思い出した。ハクリが課した「術」の試験のときだった。

「そうか。やつらは、ふたりを罠につかかって、われわれを生け捕りにしようとしているにちがいない。だから、ガラス張りなんだ……」

彼は建屋のそばに寄り、そつと押してみる。揺れるような感じがする。

簡易壁をネジで止めてあるだけのまるで固い段ボール箱といったものだ。

ふと、彼は向かつてくる光を感じた。

「センサーだ……」

素早く、身を屈め、建屋の陰に隠れる。光線から外れたことを確かめ、彼はおそろおそろ建屋から離れた。

周囲を見回し、センサーを探す。センサーカメラや透明体識別装置がいたるところに設置されてあった。彼はまず電源を切る。そして電源が戻っても、これらの装置が直ちに機能しないようにそれぞれの設定も変える。

建家のまえに戻ると、彼は急いで四方の壁を繋いでいる金具のネジを外していく。建家を解体してしまうのだ。

遠くから非常階段を下りてくる足音が響く。多分、重いものを持った男の足音だろう。意識不明の母を担いでいるのだろうか。

まず彼は後ろの壁を押し倒す。つぎはフラットな屋根を剥がし、側面の壁から切り落とす。屋根といっても側面の壁と同じ材質のものだ。

足音が聞こえる。最後は前面のガラスだ。急いで、押し倒す。

足音が一段と近づく。

急いで、彼は試射台上り、解体した建屋を確かめる。

試射場の広場に、まるで箱を開いて平面に広げたように、箱型建家が仰向けに両手を広げて倒れている。彼は一瞬、もう少し片付けたほうがいいのではないかと思った。

だが近づく足音が気になり、そのままに放置して、踵を返す。一端、ハクリのもとに戻るのだ。

31

「いま、太った男がひとりで、一〇〇一号室から地下三階の試射場にふたりを移しています。いまが救出するチャンスじゃないか……」

耀はふたりの様子や試射場につくられた箱型の牢獄用建屋とセンサー類

のこと、そして建屋を解体したことするなど、一部始終を話す。

「ミサもおればいいんだがなあ……、だがふたりがまだ意識不明の状態だということとは、ミサも動けないということになるかな……」

ハクリは頭を抱える。

「未佐さんがどうしたというのですか」

「一体同化の技をかけると、相手と一心同体のような状態になるのだ。だから、相手が突然意識不明の状態に陥ったりすると、脱出することができなくなることがある。この術を用いるときは、とくに、このことに注意することだ。ミサは意識回復の機会を待ち構えているだろうから、まず、なんとかしてふたりの意識を取り戻すことだ」

「もし、意識を取り戻すことがなかったら、どうなるんですか」

思わず叫ぶ。母と未佐がいなくなつたらと思うと、耀は気が気でなかった。

「うむ……」

「直ぐ行ってみましょう。試射場へ……」

彼はじつとしておれない。だがハクリは聞いていないのか、なぜか、黙つたまま、天を仰いでいる。

突然、彼の脳裏に黒い服の太った男が母と森野を担いで非常階段を下りてくる様子が浮かぶ。そしてふたりを試射場へ運び込んでいく。そこで建屋が解体されているのを見て、男は激怒し、ふたりを即刻処刑してしまう。

「行きますよ」

彼は我慢しきれず、動き出す。

「ヨウ、一寸待ちなさい。いま、ミサに合図を送っている。返事があるかもしれないのだ」

「でも、ふたりは処刑されてしまう……」

「なんだって……」

「処刑……」

黒の男にはふたりが生きていようが死のうがどうでもいいのだ。だから、意識不明のまま放置していたにちがいない。

「ヨウ、落ち着きなさい。いままで生かしてきたふたりをそう簡単に処刑したりはしない。いま処刑するなら、とっくの昔に処刑しているはずだ」

「……」

彼は黙つて、ハクリに恨めしそうな目を向ける。

「ふたりを救出する前に、ミサを脱出させるのだ。ふたりの救出にはどうしてもミサの手が必要なのだ」

「それで、返事は……」

「まだない。返事がなくとも、連絡しておけば、ミサは脱出の準備をはじめよう。そうすれば、意識が戻った瞬間に、直ぐ脱出できるだろう。そろそろ出掛けるとしようか」

ハクリは立ち上がった。

3 2

「おい、どうしたんだ……」

山城は呆然として、左右の腕でひとりずつ抱えていたふたりを手放した。いや、急に腕が萎えて、ふたりを抱えていた腕から力が抜けてしまったのだ。

最初、彼は意識不明のふたりをひとりずつ運ぶつもりでいた。ふたりの意識がどうしても戻らないことを確かめると、ひとりずつ運ぶほかないと思つたのだつた。

だがひとりずつ運んでは、ひとりを運んでいる間、もうひとりを放置しておくことになって危険すぎる。ことに、試射場に設置した牢獄用箱型建屋には錠前すら用意していなかった。

そこで、ふたたび予定を変更して、彼はふたりを一緒に運ぶことにしたので。

一〇〇一号室から左右の肩にひとりずつ担ぎ上げると、どすんどすんと足音を響かせ、非常階段を一段一段下りる。地下三階の踊り場まできて、一端、ふたりを肩から下して非常用扉のノブを回す。

そして今度は両腕でふたりを小脇に抱え直して、地下三階の試射場へ一歩足を踏み入れたところだった。

いままで、ふたりを一〇〇一号室に放置しておきながら、なぜ、急に危険だと思ふようになったのか、彼自身分からなかった。

部下任せにして、目隠しし、手足を縛つてあるから、放置しておいても短時間なら大丈夫だろうと思つてしまつていたのかもしれない。だが一〇

〇一号室に来て、ふたりを移動させようと思ひ、あらためて辺りを見回し、いかに不用心だったことに気付いたということか。

とにかく、ふたりの片方を運んでいる間に「天」の男が来ないともかぎらないのだ。そこで彼はふたりを一緒に運ぶことにしたのだつた。

いくら力持ちだといつても、大の大人二人を担いで三階分の階段を運ぶことは、下りとはいへ、並み大抵のことではなかった。ようやくの思いで地下三階に到着してみると、試射場のなかに準備していた建屋がすっかり

解体されているではないか。

彼は呆気にとられて、しばらく棒立ちのまま、突っ立っていた。

腕から力が抜けた途端、意識不明のふたりの身体が彼の腕から抜け落ちる。そしてふたりは廊下のコンクリート床にいやというほど叩き付けられた。

33

「痛い」

木実子の叫び声に、未佐はびっくりして目を覚ます。なにが起きたのか、さっぱり分からない。

彼女は一瞬、頭を殴られたような衝撃を感じた。意識が失うような激しい衝撃だった。だがこの衝撃で意識不明だった木実子が逆に意識を取り戻したのか。

「木実子さん、どうしたの……」

「頭がとても痛いわ」

急に、頭部に激しい痛みを覚えたのか、身体を振り、呻いている。

「どうしたのよ」

「分からない。目は見えないし、手足も動かせない」

木実子は自分が目隠しされ、手足がロープで縛られていることを忘れてしまったのだろうか。

「木実子さん、しっかりして……。いま、外へ出て、様子を見てみるからね」

彼女は木実子から脱出する。

目の前に、棒立ちの男がいた。前方をじつと見つめたまま、動かない。彼女はまえに回って、じろじろ男を見る。

この太めの男が一軒家に人形細工してふたりを拉致したのだろうか。彼女は一軒家を見張っていた「黒の集団」の一団を思い浮かべた。

一体、そんなに熱心になんにも感じないらしく、全く無頓着だった。いてみる。だが彼にはなんにも感じないらしく、全く無頓着だった。

彼女は彼の視線の先に目を移す。奥行きが数十メートルもありそうなフィールドの中央から奥まった附近に解体された建物の壁や屋根の残骸が広がっている。それはまるでアッパーカットを受けて大の字にのびてしまったボクサーのような形だった。

しばらくして、男は動き出した。コンクリートの廊下からフィールドに下りると、奥の方へ歩いていく。

彼女は目を凝らして、男を追う。奥の壁際には砂袋が積み上げられ、そのまえに棒杭が並び、さまざまな人型の的が掛かっている。

「ああ、ここは地下の試射場なのかしら」

彼女は眩ぎ、男の動きを追っていく。男は的の棒杭一本を肩に担ぐと、フィールドの中程に運んだ。そして真ん中に設置する。男はもう一度奥へ引き返し、もう一本の棒杭を運ぶ。

二本の棒杭を並べてほぼ中央に設置すると、男はフィールドから廊下へ上がってきた。廊下の端に立って、棒杭の位置を確かめている。

よく見ると、男が立っているところは射撃台らしい。そこからの向って射撃するつもりなのか。

男は満足そうな顔をして、ふたりが横たわっているところに戻ってきた。

そしてまずひとりを担ぐ。森野だった。

森野はまだ意識不明なのか、男の肩のうえで、頭を下げ、腕をだらりと落とし、両足もぶらぶらしたままだった。棒杭のところまで運ぶと、男は砂袋を投げ落とすように、森野を肩からどすんとフィールドに落とす。そして棒杭のそばに立たせ、ロープでぐるぐる巻きにする。

男が戻ってきた。未佐は急いで、木実子のなかに入る。

木実子を担ぎ上げる。一瞬、男は首を傾げる。そして木実子のお尻をポンポンと叩く。意識を取り戻したことに気付いたらしい。

棒杭に近づくと、木実子を足からフィールドに立たせる。それから、木実子をゆっくり棒杭に括り付けると、男は試射台のところに戻っていった。

「木実子さん、実は……」

未佐はいま見てきたことを話す。

「そうだったの。ここは地下の試射場なのね。すると……」

「あの男たちのことだから、なにをするか分からないけど、なにか魂胆がありそうな気がするわ」

「でも、ここは試射場？ それとも射撃場なの」

「……………」

「耀によろしくね……」

「なにを言ってるの。わたしは一端、外へ出るけど、必ず助けに来るから、待っていてね。いいわね」

未佐は「ハクリ、ハクリ、どこにいるの」とこころのなかで叫びながら、外へ飛び出した。

「ここだったの、探したわ……、ああ、耀ちゃんじゃないの」

煙突の陰から頭を突き出してはいるハクリを見付けて、未佐が近づいてきた。隣に、耀が煙突に背を預けて腰を下ろしている。

「ミサ、よかった。ふたりに意識が戻ったのかね」

「そうなの……、それが……」

「未佐さん、母は……」

「大丈夫よ。もうすっかり元に戻ったわ。それよりも早くふたりを助けに行かなくちゃ……」

未佐はハクリと耀を交互に見ながら、ふたりが意識を取り戻したときの様子や試射場での出来事などについて、一部始終を話した。

「棒杭に……、じゃ、あのやつ、母たちを標的にしようとしているのか。

ハクリ、直ぐ行かなくちゃ……」

「待て。敵は一人だね。試射場は地下三階だったね。それじゃ、わたしが敵の相手をしているうちに、ヨウとミサがふたりを外へ連れ出すのだ。出口は分かるかね。外へ出たら、車を奪って、できるだけ遠くへ逃げ出すんだ。いいね……」

ハクリは念を押すように、繰り返す。

「ふたりには発信機が体内に埋め込まれているの。直ぐ追い掛けられるわ。

これを先に処置しなければ、直ぐ捕まってしまう」

「発信機を壊してしまうんだよ。電波が出ないようにすればいい」

「耀ちゃん、そうして……」

「ハクリ、意識を取り戻しているなら、ふたりは自分で歩けるよ。ふたり

を未佐さんに任せていいね。ぼくも『黒』の男を相手に闘うよ」

「耀は地下全体の構造が分かっているから、ふたりを連れ出すほうがいいのだ」

ハクリは断定的に言う。だが耀は聞いていなかった。未佐に外への道順を説明しながら、途中まで送り、ふたたび試射場へ戻れろうと思う。

あの太めの男はきつと手強いにちがいない。年を取り、痩せ細ったハクリひとりじゃ、どうなるか分からない。それに彼には年老いたハクリと力漲る壮年の男とが一体どのように闘うのか、強い関心があった。

若い彼は経験に飢えていたのだ。未佐に「耀ちゃん」と呼ばせないためにも、早く多くの経験を積んで、大きくなりたかった。

「じゃ、そういう段取りでいこう。いいね。行くぞ」

ハクリが未佐と耀に目配せする。

「了解」

ハクリは煙突のなかへ入っていく。耀がつづき、未佐がその後を追った。

35

「いまだ」

ハクリが手を挙げて合図する。ハクリは非常用階段の踊り場で、一瞬立ち止まる。ドアの隙間からなかを覗き、地下三階へ入っていく。耀と未佐が後につづく。

目の前に、太めの男の大きな背が壁のように立ちはだかっていた。男は試射台に立ち、的に向かって銃を構えている。

「ミサ、いまだ。ヨウ、行け」

ハクリの声がした。つぎの瞬間、太めの男が銃を持ったまま、宙に舞った。そしてコンクリートの廊下に激しく叩き付けられた。

男は低い呻き声を漏らし、仰向け伸びている。

「さあ、早く。ふたりを連れ出すのだ」

ハクリの声に、耀はフィールドに飛び下りる。未佐も中央の棒杭をめざす。

「多分、ふたりは歩けると思うわ。いま下りてきた非常階段を上げればいいのね。わたしが木実子さんのなかに入つてふたりをエントランスホールへ誘導するから、耀ちゃんは先に行つて、車を調達してくれない」

耀に追い付き、未佐は話かけながら、急いで、棒杭のふたりのロープを解いていく。手足が自由になると、ふたりは自分で目隠しを外した。

木実子と森野の顔が現れた。

「ママ……」

彼は思わず、母を呼ぶ。だが木実子には聞こえない。彼の姿も見えないのだ。呆然と棒立ちしている彼に目を向け、未佐が激しく手を振る。姿が消えた。

ふたりが歩き出した。未佐が木実子と一体化したらしい。

木実子が先頭に立ち、ふたりは急いでフィールドを横切り、廊下へ上る。

彼は後からふたりを追う。

「ヨウ、気をつけてな。これを持つていきなさい」

ハクリだ。ハクリは彼に拳銃のような小さな銃を手渡す。電子銃だという。

彼は黙つて受け取ると、ふたりを追い越して前へ飛ぶ。

一瞬のうちに、非常階段を駆け上がり、秘密の扉からロビーを抜け、エントランスホールを横切る。エントランスのガラスの扉から外へ出る。

エントランスを出たところに、車が乗り捨ててあった。前方の駐車場にも数台の車が駐車してある。彼はそのなかから一台を選んで、扉を開けて、ふたりを待つ。

「あの車ね」

エントランスから出てきた木実子が真直ぐ車に近づいてくる。未佐が耀の選んだ車を見付け、木実子に指示したにちがいない。

「森野さん、あなたが運転して……」

木実子が後ろから近づいてくる森野を振り向き、自分は助手席へ回る。

彼は素早く後部座席に潜り込む。

車は動き出すと、直ぐフルスピードで走り出す。

「未佐さん、いまもふたりの発信機から電波が出ているのかな。出ているのなら、なんとかして早く止めなければ……」

彼は後部座席から助手席に身体を寄せ、低い声で呼び掛ける。

「そうね。なにかいい方法はないかしら。ふたりの左肩にそれぞれ埋め込まれているらしいのよ」

「肩か。電子銃をもっているけど、それで発信機を撃つたらどうかな」

「肩に穴が開くんじやないの」

「ふむ……、かもしれないが……、でも電波を出したままでは直ぐ見つかってしまうけどな……。なにかで発信機の電源を切ることができないかな……」

遠くでヘリコプターの爆音がした。

「ヘッドライトを消して、早く……」

彼が叫んだ。だが森野には聞こえない。

「未佐さん……」

「耀くん、なに……」

「ヘリコプターが……、ヘッドライトを消して、早く、どこかへ隠れたほうがいいんじゃないかな……」

「いま、木実子さんと発信機のこと話していたんだけど、銃で撃つてもいいと言っているけどどうする？」

「いざとなったらそうするほかないかもしれないが、ふたりともそうしたら、運転できる人がいなくなってしまうかもしれない。電子銃で肩にどんなダメージを受けるか分からないから」

「そうね。電波が出ているなら、隠れても仕方がないわね」

「ヘリコプターの爆音が近づく」

「じゃ、フルスピードで逃げよう。なんとか、ヘリコプターの追跡をかわしながら、そうすることにしようか」

「それじゃ、高速に乗ろうかしら。横断橋やトンネルが多いと都合だわ」

木実子さんに高速道路に乗り入れるように言うわね」

「了解」

耀は短く応え、空を見上げる。暗い空の向こうから、ヘリコプターのものか、点滅する光が近づく。

「つぎのインターから高速に入るそうよ」

車が大きく円を描き、ゲートに向かう。ヘッドライトが交叉する。車はヘッドライトを縫って、追い越し車線に入り、車をつぎつぎに追い越していく。

ヘリコプターが急速に近づいてきた。高度を下げて車に近づき、断続的

にサーチライトを点灯する。

「横断橋よ」

森野はまた車線を変える。ふたたび追い越し車線に入り、スピードを上げる。ヘリコプターも追い掛ける。

前方に横断橋が現れた。ヘリコプターは急上昇し、易々とかわす。

その瞬間、森野は追い越し車線を離れ、巧みに隣の車線の車列に紛れ込む。だがヘリコプターは直ぐ執拗にふたりの車を追う。森野はまた車線を変える。

「つぎの出口で下りようか。出口はまだか……」

森野が叫ぶ。

「もう少し先のようによ」

ヘリコプターが車の真上に来た。高度を一段と下げ、同じスピードで頭上を飛びつづける。サーチライトが車を捉える。

ヘリコプターからワイヤーがスルスルと落ちてきた。先に大きな爪が付いている。車体に触れた瞬間に、爪ががちり車体を掴まえた。

「おい、どうしたんだ」

森野はアクセルを一杯に踏み込んでいるのか、車輪が急速に回転する。空回りしているのだ。車が大きく揺れる。

ワイヤーが巻き上げられているのか、車の車輪がさらに激しく空回りし出した。ワイヤーはさらにスルスルと巻き上げられていく。

ヘリコプターは車をぶら下げたまま、急速に高度を上げた。

「未佐さん、このままではKキャンプに連れ戻されるかも」

「え？ Kキャンプ？」

「あ、さっきの試射場のあるところのことだよ。そのまえに、ぼくがヘリ

コプターに乗り込んで、ヘリコプターを乗っ取るからね。そしてどこか適当なところを探して車を下ろすから、母たちをよろしく頼みます。じゃ」
「耀ちゃん、待って……」

彼は未佐の声を振り切り、車の窓を開けると、ワイヤーを伝って上っていく。

ヘリコプターに手が届いた。太めの男の顔が目の前にあった。

男はドアを一杯に開けている。ヘリコプターのなかからぶら下げている車を見ているらしい。

ヘリコプターが前進を止め、低下していく。ホバリングをはじめた。

「冷たい……」

水滴が飛んできて、顔に当たったのだ。彼は下を覗く。水面が光っている。

「湖か……」

ヘリコプターが前進をはじめた。しばらく進んで、ふたたびホバリングする。同じことを何度か繰り返す。

「あ、車を湖に沈めるつもりなんだ。待て……」

彼はヘリコプターのなかへ入ると、太めの男に食い付く。胸が合った瞬間、彼は男と一体同化する。

男は一瞬のけ反るが、直ぐいつもの状態に戻った。

「なにを考えているんだ」

「なに、お前は誰だ」

「車をどうする気だ。湖に車を沈めて、ふたりを殺そうというのか」

「……………」

「見つかるぞ。そしてお前は死刑になるのだ」

「馬鹿言え。死刑？ 笑わせるな。誰に見つかるんだ」

「じゃ、なんで何度も沈める場所を捜し回っているのだ。下手をすれば、見つかるかもしれないから、見つけられそうにないところを探しているんだ」

「なにを言うか。車が完全に水没する水深の深いところを探しているだけだ」

「ウソ言え。さっきのところはいまいるところより深そうだったじゃないか」

「そりゃ、見つからないほうがいいに決まっている」

「なんで、ふたりを殺さなければならぬんだ。理由はなんだ。どんな理由か知らないが、死刑の代償を払う値打ちがあるのか」

「うるさい。死刑、死刑とほざくな」

ヘリコプターはホバリングしている。やがてワイヤー巻取り機が動き出した。車が湖面へ向かって下りていく。

「やめろ」

「痛い。この野郎……」

「止めないと、お前は死ぬ」

「なんだと……」

「ウソだと思えば、こうしてやる」

耀は男の心臓を力一杯掴む。

「苦しい、止める」

「分かったか。直ぐワイヤーを巻き上げるんだ」

「うむ……」

ヘリコプターは相変わらず車を湖面すれすれに下げたまま、湖の中央で

ホバリングをつづけている。

「早くするんだ。さもなければ……」

彼は一度弛めた手の指にふたたび力を加えていく。

「うーん……。俺を殺せば、どうなるか分かってんのか。あのふたりも車もろとも湖底に沈むことになるんだぞ」

「お前も一緒にな。それでいいのか」

彼は心臓を掴んでいる指にさらに力を加える。

「うーん、苦しい。分かったから、止める」

「早くしろ」

「俺を殺せば、お前も死ぬんだぞ……」

「往生際の悪いやつだ。早くしないと、お前も死ぬことになる。いいんだな」

もう一度、力一杯、心臓を締め付ける。

「うむ……」

浅黒い男の顔が黒くなり、そして白くなり始める。

つぎの瞬間、ワイヤーが巻かれて、車が上がり出した。

「湖から出るんだ。湖岸から離れたところに車を下ろせ」

「……………」

ヘリコプターが前進をはじめ。湖を飛び越えて、森のなかへ入っていく。空地を見付けると、ヘリコプターはホバリングをはじめた。

ワイヤーがスルスルのびて、車が空地に着地する。ワイヤーの先の爪が車から離れ、ワイヤーが巻かれ始める。

ヘリコプターは次第に高度を上げながら、前へ進んでいく。

耀は急に睡魔に襲われ、そのまま眠りこんでしまった。

第四章

36

「どこかしら……」

木実子はドアを開け、助手席から足を伸ばして、地面に下り立つ。

朝の冷気が身体を包んだ。一瞬、反射的に身を縮めるが、それに抗する
ように、背筋を伸ばし、息を胸一杯吸い込む。

木々の間を透して、前方に湖面が白く光っている。森を通り抜けると、
目の前に湖面が広がった。

彼女は湖畔に佇み、湖面に目を向ける。

「おはよう、木実子さん」

「え……。未佐なの、まだわたしのなかにいたのね」

彼女は一瞬驚きの声を上げたが、直ぐ平静さを取り戻す。

「もうすぐ帰るわ。ハクリが迎えに来るの」

「ハクリ？」

「『天』の友だち。わたしたちの先生ね」

「耀の先生なの」

「そう……」

「そういえば、耀はどこかしら。一緒じゃなかったの」

「……………」

「ねえ……」

「昨夜のこと、知っている？」

「昨夜？」

「ヘリコプターに追いかけて逃げて回ったこと……」

「そう言えば、そんなことがあったようね」

彼女は必死に記憶を呼び戻す。

確か、どこかへ連れて行かれる直前に、あの男が鼻のなかになにかを注
入したようなことがあった。記憶が薄れているのはそのせいだろうか。

昨日の今日だと言うのに、記憶が薄れてしまっている。彼女はしきりに
記憶を辿るが、記憶が薄れて灰色の世界だけだった。

「とうとうヘリコプターに捕まって、ここに運ばれてきたのよ」

「そうなの。なんか揺られて、船酔いのような気分に襲われて、途中でダウ
ンしてしまっただけわ」

「それじゃ、なにも覚えていないわね」

「……………」

彼女は何度も記憶を呼び戻そうと試みる。

「あの男が……」

「あの男？」

「なんのことか彼女には分からないのだ。」

「ヘリコプターの男よ。実は……」

未佐は車がワイヤーで吊るし上げられて運ばれ、湖に沈められようとし
たことの一部始終を詳しく話した。

「そうだったの。そんなことがあったの。この湖に沈められるところを耀
が救ってくれたというのね。それで、耀はいまどこに……」

目の前に広がる湖面を見つめたまま、彼女は動こうとしない。

「実は、ヘリコプターの男と一緒になのよ」

「まあ……」

一声を発したきり、彼女は口を固く閉じ、未佐がいくら話し掛けても返事すらしようとしなかった。

37

耀は揺れるような感じがして目を覚ました。不思議に思い、周りを見渡す。だがなにも見えない。

「そうか。ぼくはあの男と『一体同化』しているのだ……」

彼は昨夜のことを思い浮かべる。だが薄ぼんやりとしか浮かばない。ヘリコプターが湖上から引き返し、帰途につくや、彼は睡魔に襲われ、男のなかでうとうとし出したのだった。

彼はじつと男の様子を窺う。男がベッドのなかでもぞもぞと動いているらしい。

「ここは母たちが一時監禁された部屋と同じ部屋なのか……」

昨夜、ヘリコプターでKキャンプの施設である建物に戻ると、男はそのまま宿泊部屋のベッドに潜り込んだようだった。そして彼もそのまま眠り込んでしまったにちがいない。

どうしようか。このまま、男のなかに居続けるか、それとも一度外へ出るか。彼は一瞬迷った。

もしかしたら、ハクリが煙突の陰で待っているかもしれない。とすれば、男から抜け出て、まず、昨夜の出来事をハクリに報告するのがいいのなにか。

だが一度抜け出てしまえば、もう二度とこの男のなかにもぐり込めないような気がする。男は今回のことに懲りて、早速「一体同化」対策を講じるにちがいないのだ。

それに、千里眼のハクリに会えば、彼の胸のうかが知れてしまう。

「オセロ作戦」の決行を知れば、ハクリも黙っていない。ハクリは彼を決して二度と自由にさせずに、直ぐさま「天の基地」へ連れて帰ろうとするだろう。

彼は折角の機会をふいにしたくなかった。簡単なことではないが、自分から言い出した「オセロ作戦」をなんとしても成功させたいのだ。たとえ初回はうまくいかなかったとしても、せめてつぎに繋がるものにしておかなければならない。

「黒」を「白」に変えるにはどんな手を使えばいいのか。そのためには、なにをどうすればいいのか。

それにしても、この男は手強そうだ。この男は目つきが鋭く、なんとなく癖がありそうで、一筋縄にはいきそうもない。

しつかりしろ。お前はいま、こんな難物を相手に、初めての試みである「オセロ作戦」を決行しようとしているのだぞ。いや、いま決行中なのだ。

まだ「天の組織」の一員になってから日も浅いお前に、こんな大仕事ができると思っているのか。無謀にも程がある。止める。止めるんだ。

もうひとりの彼は盛んに牽制する。

彼は決行か、それとも退却かの迷いのなかで、何度も、こんな声を聞いた。だが一度踏み出した足は前へ進もうとしてやまないのだ。

とうとう、彼は腹を決めて、男のなかに留まることにした。

もぞもぞ動きが収まった。男はベッドで一度伸びをすると、身体を起こ

し、ベッドから下りた。

それから男はバスルームに入り、朝のオットメをするだろう。彼は黙って、男に付いていく。

38

「なんで、金魚の糞のように、俺に付いて来るんだ。もう帰れ……」

山城は一思いに、ふたりを車ごと湖に沈めなかつたことが気になつて仕方がなかつた。別に、彼はそのことを後悔しているわけではない。ただ、いつも強気で押し通すのに、あのときなぜか急に弱気になつてしまつたのが気になるのだ。

「居座りつづけるこの男のせいだ……」

たかが心臓を掴まれたくらいで、敵の言うままになるとは、そんな弱い自分をどうしても許せなかつたのだ。

たとえいくら苦しくとも、敵に降参してしまふくらいなら、死んでしまふべきなのだ。これが俺の美学だつた。それなのになんというさまだ。

彼はなんとかして、居座りつづけるこのやつを亡きものにしたかつた。胸を叩いたり、勢いよく頭を壁に叩き付けたりしたもした。だがやつには一向に堪えないらしい。胸か、それとも頭か、とにかく身体のどこにか住みついているのか分からないが、やつは悲鳴を発することも、止めてくれと懇願するでもなかつた。

こんなことを繰り返しては、自分の方がかえつておかしくなつてしまふまいそつだつた。そしてとうとう彼はこれまでの作戦を変え、口でやつを

やつつけ、追い出すことにしたのだつた。

「なんで、急に……。追つ払らおうとするのだ。ぼくはもうしばらく厄介になることに決めているんだ。我慢してくれ」

「なんだ。邪魔だ。とつと出ていってくれ」

「お前さんが性根を入れ替えるまでは、出ていくわけにいかないのだ。いつ、あのふたりに悪さをするか分からないからな」

「なんだと……」

「ふたりを車もろとも湖底に沈めるつもりでいたのに、なぜ、いとも簡単に途中で止したんだね」

「それは心臓を掴まれ、苦しかつたからだ」

「ウソ言え。ふたりに発信機を埋め込んであることを思い出したからだ。無理やり沈めなくとも、ふたりをいつでも探し出せると考えたからだ」

「ウルサイ。黙れ」

「そいかい。じゃ、お前さんも静かにしてしてくれ。ぼくはこれからしばらく昼寝するからね」

「ふざけるな。早く出ていけ」

「なにをいまさら……。お前さんはわたしを探していたんじゃないの。ふたりを拉致までして……」

「……………」

このやつは一体何者なんだ。彼はいつのまにか自分のなかに住みついた者の正体を知らなかつた。いや、知ろうとしなかつた。というより、今まで何者が住み付いているのか考えてもみなかつたのだ。

彼はじつと考え込む。どうやってこやつが俺に住みついたのか。いつから住みついたのか。そして自分がこの男を探していたとは……。

「……一体、お前は何者なのだ。無断で、俺に住みつくとは。名を名乗れ。どこのどいつだ？」

「わたしは『ヨウ』だ。『耀』というのだ」

「なに、『ヨウ』だと。なんだ、それは……」

「名前だ……」

「フルネームは……」

「フルネーム？」

「そうだ。俺のフルネームは『山城謙』というのだ」

「ヤマシロケン、じゃ、名は『ケン』か」

「そうだ」

「わたしは『ヨウ』だ」

「だから、フルネームはなんというのだ。お前の姓は……、あるだろう。」

まさか、憶えていないんじゃないだろうな」

彼は単刀直入に女との関係を尋ねたかった。だがそれではかえって怪し

まれ、すべてを隠蔽されてしまう恐れがあった。

「わたしの姓か……」

「そうだ。お前の姓だ……」

「……………」

ヨウは黙っている。

「どうした……」

彼はせつつく。あの女は確か「秋野木実子」と名乗っていた。彼は女の名前を告げたとき、ヨウという男がどんな表情をするか見たかった。彼は見ることでできないヨウの顔付きをいろいろ想像する。

「……………」

ヨウは黙ったままだ。

「お前の姓は……」

彼は「秋野」と言おうとした。突然、ヨウが動くような気配を感じて、

急いで、息を呑み込む。

だがいつまで待っても、ヨウは口を開かない。苛立ちが募っていく。

やはり、ヨウという男とあの女は親子なのだろうか。だから、そのことを

をさとられないように、黙秘をづづけているのだろうか。

彼は記憶をたどる。地区代表に命じられて、一軒家にいるあの女の身辺

を調べたときのことを思い浮かべる。

あのとき、彼女が数年前に男の子を出産していることが掴み、その旨報

告したことがあった。だがこの男の歳恰好は、話のやりとりから推測して、

一〇代後半か、いや、二〇代前半といったところだろう。女が三〇代後半

か、それより若いとすれば、この男と女は親子ではないかもしれない。

「……ところで、お前はあのふたりを殺す理由が知りたいと言っていたな。

なぜだ。なぜ、ふたりを助けようとしたのだ」

彼は論点を変える。作戦変更だ。

「ところで、ケンさん。あなたはなぜ『黒』の一員になったのですか」

ヨウも話題を変えてくる。

「なんだと……」

彼は虚を衝かれて、一瞬戸惑う。

「あなたは『黒』の一員なんですよ」

「『黒』とはなんだ。そんなことより、まず、俺の質問に答えるんだ」

「答えたら、ぼくのにも答えてくれる？」

「うう……」

彼は口籠る。一瞬「ゲームをしてるんじゃない」と言おうとした。だが、なぜか「このヨウという男とのやりとりはエンドレスのゲームみたいなものだ」という思いが、突然、脳裏の湧いてきた。

そう思った途端、彼はこのまま当分ゲームを楽しむのも悪くないという気がしたのだ。そしていまはゲームの最中なのだと思いついたのだ。

39

「ハクリ、どこにいるの。耀と会った？ 無事帰ったかしら。わたしたちは、いま、かつての一軒家のあった湖畔にいますのだけど……」

いくら話しかけても返事すらない木実子から抜け出すと、未佐はハクリを呼び出し、耀のことを尋ねる。

「ヘリコプターが戻ってきたが、いつまで待ってもヨウが現れないのだ。どうしたのかと思っていたが……」

未佐は昨夜の一部始終を話す。

「そうか。やはり、あの男と一体同化したのか。それじゃ、しばらくしたら、そっちへ迎えに行くよ。ミサも一度、『天の基地』へ帰ったほうがいいだろう。アムンへの報告もあるし、これからのことも相談しなければならぬからね」

「いいわ。木実子とも……」

「帰る準備をして待っているように。わたしはもう一度こちらの様子を見回ってからにするから。念のために、ヨウがどうしているか確かめたいのですね」

「了解」

木実子は相変わらず湖畔に佇み、虚ろな視線を湖面に投じている。未佐は木実子に別れを告げるべきか、迷った。耀の安否が気かりで、気もそぞろにちがいないことを思うと、木実子を独り残していくようなことはできなかった。かといって、このままいつまでも木実子のもとに留まっていられないのだ。

「ミサ……」

ハクリだ。いつ現れたのか、目の前に立っている。

「まあ、早かったわね」

彼女は迷って、まだ木実子に別れを告げずにいた。

「さあ、準備はいいかな」

「ハクリ、耀は……」

「母親を守りたいのだろう。だから、当分、あの男から離れずにいることだろう。それがお母さんの安全に繋がると考えているにちがいない」

「あ、そうか。変なまねをしないように、あの男を見張っているというわけね。耀ちゃんもなかなかやるわ」

彼女は木実子たちにまだ発信機がついたままであることを思い出した。電波を出しつづける母の安全を守るには、そうするほかないのだ。

「まあ、そういうこと」

「じゃ、待って。彼女にそう言うってくるから」

「それから、われわれは一端、『天の基地』へ帰るけど、ミサだけは直ぐ戻って、対『黒』作戦をふたりと協働することになるんだよ。そのことはもう話してあるのかな。ヨウとはそのときに会う機会があるかもしれない」

「そうだね」

未佐は湖畔に佇んでいる木実子のもとへ急ぐ。ハクリの目はじつと未佐の後を追う、木実子と一体同化するのを見守っていた。

40

「ケンさん、実は……」

耀は男の本心を知りたかった。男に心を開かせるには自分のことも素直に話すことが必要なのだ。

自分の方で心のなかを隠しておきながら、相手の心のなかを知らうとしても、それはムリだ。自分が隠せば、相手も隠す。相手に心を開かせるには、まず自分のほうから心を開くほかないのだ。

「なんだ。俺は忙しいんだ。いつまでも、お前の相手はできない。どうして居座っているんだ。黙って、早く出ていってくれ」

「出ていくわけにはいかない。いつ、あのふたりに危害を加えるか分かったもんでない。だから、ここに居座って、監視していなければならぬのだ」

「あのふたり……」

「そうだ。ふたりに発信機を埋め込んで追い回しているのは、なぜなんだ。なぜ、あのふたりを殺そうとしたのだ」

「もうあんなやつらはどうでもいい」

男は着替えを済ませると、部屋を出る。

「どこへ行く。話して置きたいことがある」

「なんだ……」

歩きながら、聞くつもりらしい。

「ケン、あれはわたしの母だ。だから、殺されるのなら、その理由を是非聞いておきたかったのだ」

「え、なんだって……」

「だから、彼女はわたしの母だというのだ」

「うむ……、やはり、そうだったのか……」

「分かったか。さあ、今度はケンさんが話す番だ……」

「……」

男は地下一階の執務室に入ると、なにを迷っているのか、しばらく机で考え込む。ふたたび、立ち上がると、非常用階段を下りはじめる。

踊り場で非常用ドアを開け、地下三階の射撃場に入る。フィールドには牢屋用建屋の残骸や棒杭が散乱したままだった。

男はのっそりした動作で、フィールドへ下りていく。そしてのろろと残骸類を片付けはじめる。

すべてを片付けると、男は執務室に戻った。無言のまま、身動きひとつせず、しばらく机にじっとしていた。それから、おもむろに、口を開く。

「あの女がお前の母親か。母親というのはそんなに大事なもののか。自分の身の危険も顧みず、どうしても助けたいと思うほど大切なものなのか……」

「……」

彼は戸惑う。「突然、なにを言い出すんだ」と言おうとしたが、声にならなかつた。男の声に乾燥し切ったなんともいえない悲痛な響きを感じたからだつた。

男にながあつたのだろうか。彼は男の顔を見たいと思った。だが動くことも、口を開く気も起きなかつた。

男も黙っている。沈黙が長くつづいた。

「俺には父も母もないから、そんな気持ちが分からないのだ……」

「え？」

「俺には、父というひとと母というひともないのだ」

息遣いがようやく声となったような、まるで胸の奥から絞り出すような声だ。

「……………」

彼には理解できない。どこからどうして生まれてきたというんだ。

「まあ、俺は生まれつき孤児みたいな存在なのだ。それだけだ」

彼はどう応えればいいのか分からず、口を固く閉じたまま、ひたすら男が口を開くのを待った。だがいくら待っても、男は口を開こうとしなかった。

4 1

「あ、帰ってきたか。まあ、そこに掛けなさい」

アムンは顔を上げ、ハクリと未佐を迎え、執務机の横にあるソファをすすめる。

ハクリはKキャンプの様子を報告し、未佐はふたりの救出の模様を逐一を話した。アムンはじつと二人の話に耳を傾けていた。

「ヨウは『黒』のひとりに、いまも一体同化しているというんだね」

しばらくして、アムンはぼつんと言う。その声には「なぜ一緒に連れて帰ってこなかったのか」という響きがあった。

「実は、ふたりの体内には発信機が埋め込まれていて、ふたりを守るにはそうするほかないと考えたのだと思いますが……」

彼女は耀を思い、木実子を思い浮かべる。

「ハクリ、一体同化している相手が死ねば、どうなるんだったかね」

アムンはハクリを見つめる。

「はあ……」

「閉じ込められたままになってしまっただけじゃなかったかね」

「抜け出る方法はありませんが……、でもとても難しいです……」

「ヨウにはその方法を教えてありますか」

「いえ、まだ……」

ハクリは消え入るような声で応える。

「あの男が殺されれば、耀は閉じ込められたままになるのですか、そんな……」

彼女が叫ぶ。

「落ち着きなさい。ミサ、ふたりを助け出すときにその男のほかに誰かいましたか」

アムンがじつと未佐を見る。

「それが不思議なことに、ずつと、その男が独りきりでした。ね、ハクリ。試射場でもあの男が一人だけでしたね」

「そう。それで、その男はどんなポジションについているようでしたか」

「なんでも、周りでチーフと呼んでいる……、あ、そういえば、例の一軒家作戦では隊長役のようでしたが……」

彼女は一軒家で木実子と一体同化したときのことを思い浮かべた。あのとき、「黒の集団」に見つかって、一軒家が連中の家捜しに遭い、木実子

のなかで何日も過ごしたことがあった。そのとき指揮していたのが、あの男だった。

「そうか。もし、その男がそのようなポジションにあるのに、自分一人だけでふたりを処刑しようとしたとすれば（事実、そうしたのだった）、その男にはふたりに関して人に知られてはならない秘密があると思えない。この秘密が洩れない限り、ヨウは安全だ。だがもし……」

「秘密が洩れたときは、耀は……」

彼女は気がでない。

「非常に危険だ。その男の命が狙われるかもしれないからだ。ハクリ、なにかいい方法はないか」

アムンはハクリに目を向ける。だがなにか考えているのか、ハクリは応えず、目を伏せたまままだ。

「ハクリ、どうした？」

「ヨウは『オセロ作戦』を実行しようとしている。ここで手助けをしては、それを邪魔することになりかねない。ここはじつと見守るほかないのではありませんか。ヘタに動いては、かえって男の秘密を暴くことに加勢することになりかねないからです。もちろん、非常事態が発生したときには、即座に救助に行ける態勢を整えておくというまでもありませんが……」

「そうか。ヨウを信じよう。ミサはヨウをよく見守ってあげなさい。それはそうと、ミサにはそろそろ例のふたりとの協働作戦をはじめてもらおうか。『黒』の連中もいろいろ動き出しているらしいから」

「そのことですが、ミサがふたりのひとりであるヨウの母木実子と一体同化して、内面から手助けするとして、外部からわたしがミサに情報提供とか、必要なものを届けることにしたいと考えているのですが……」

「そうか、それがいい……」

アムンが目を丸くして、ハクリに頷く。

「リアルの世界では、あのふたりが行動の主体とならざるをえないので、われわれの手助けがどれほどの効果があるのか、皆目見当が尽きません。とりあえず、ふたりの住処を探すことからはじめます。それで、よろしいですか……」

「とにかく、やってみよう。頼んだよ」

ハクリは未佐を促し、ふたりのもとへ引き返していく。アムンは立ち上がり、じつと二人の後姿を見送っていた。

42

山城はいらいらして、執務室のなかを絶えず動き回っていた。どこのどいつか分からない男が身体のかなかに住みついているかと思うと、気持ちが悪く、どうしても落ち着かない。気になって仕方がないのだ。

いつも身体はどこかでいまにもむずむず動き出すようで気がしてならなかった。それにいつもこころのなかを覗き見されているようで、薄気味悪くて堪らなかつた。

「早く、出ていってくれ。あのふたりを無罪放免するからさあ……」

「なにをいまさら言っているんだ。ふたりに発信機を付けておきながら」

「そのうち、バッテリーが切れる」

「じゃ、それまでは居座らなきゃならないか」

「なんだと、全く鬱陶しいやつだ」

「ところで、『孤児みたいな存在だった』とはどういうことだ。それと『黒』との関係はなんだ」

「『黒』ってなんだ。気安く『クロ』、『クロ』というな」

「じゃ、きみたちはなんで黒装束なんだ。そろいも揃って。これじゃ、『黒の集団』そのものじゃないか。で、『黒』は世界制覇を目論んでいるとか、本当か」

「知るか、そんなこと。俺たちは上からの命令で動いているんだ」

「そうか。じゃ、ふたりを拉致したのも、上からの命令なんだな」

「……そういうことになる……のだ」

「ホントか。じゃ、上のやつに尋ねてもいいんだな」

「なにを聞くんだ」

「拉致の理由だ。なぜ、ぼくの母を拉致しなければならなかったのかだ」

「うーん……」

「ケンの上官は誰だ。ここにいるのか」

「……………」

彼は地区代表を思い浮かべる。竜巻で死亡したと報告した一軒家のふたりが生きていることを知ればどう思うか。こともあろうに、部下のひとりかふたりを拉致していたことを知れば、ただでは済まないだろう。

それにしても、この男はどうしてひとの身体の中へ入ったり出たり自在にできるのか。もし出入り自在だとすれば、俺のなかから出さないようにしなければなるまい。俺から出て地区代表に乗り移り、ヘタにふたりのことを尋ねられては、内緒の拉致がばれてしまう。

「なぜ、黙っているんだ。上官に話されては困るのか」

「上官は……」

「うん……、なんだ」

「拉致のことは知らないのだ」

「なんだと……。ということとは、拉致はケンの一存だったのか」

「まあ、そうだ。それよりも、お前は一体何者なんだ。どうして俺なんかに取り憑いているんだ」

彼は追い詰められていく自分を感じ、ヨウという男がますます不気味に思えてきた。だが簡単に追い出すわけにもいかない。どうしても地区代表に乗り移させてはならないのだ。

たとえ男を追い出すことに成功しても、代表に取り憑いてふたりの拉致のことを話をされては、俺の命運も尽きるというものだ。代表は俺にどんな罰を課すか分かったものではない。

だが待てよ。欲しがっていた男の写真を見れば、代表は喜ぶに違いない。そうなれば、かえってふたりの拉致は報賞ものか。といっても、これを自分から言うのであればいいが、男から告げられてはダメだ。どうするか。

彼はいろいろなケースを想定して考えるが、なかなか結論が出なかった。ただなんとなく、いますぐ追い出すよりも、もう少し男のことを知ってから、ゆつくり結論を出してもいいのではないかと思いはじめていた。

「ふたりを拉致したのは、一体なぜだ」

「耀はどこまでも追い詰めていく。」

「それは……」

彼はふと、ヨウという男を知るために、すべてを話してみようかと思つた。そしてとりあえず、一軒家を監視しているとき、地区代表が女についていると詳細な情報を要求していたことを話す。

「ふむ、それでは、ケン。なぜ、ぼくを探していたんだ」

「え？ べつにこれといった理由はない。ただ……」

「ただ、なんだ……」

「地区代表は女が子供を生んだことに非常に興味を示したからだ。でもその子が死亡したらしいことが判明すると、なぜか、急に、女の情報を欲しがらなくなったのだ」

「それで……」

「一件落着となったというわけさ」

「それなのに、なぜ、ふたりを拉致したのか。それも上官に内緒にしてだ」

「代表はそこで諦めたが、俺は諦めなかったということだ。なにかあると思つたのさ。それで……」

「そのために、ふたりを拉致し、いままで匿っていた……」

「その通り」

「だがふたりを亡きものにしようとした。なぜ、殺そうとしたのか」

「彼らはわれわれの秘密を知つたからだ」

「秘密？ なんだ、それは……」

「あの建物の地下構造についての秘密だ。だから、地下で処刑するつもりだった」

「それじゃ、これからもふたりを追い回すつもりか……」

「秘密を知つた以上、そうせざるをえない。だが……」

「だがなんだ……」

「記憶が消えて、忘れてしまつていれば、その必要はない」

「忘れる？ それは一体どういうことだ」

「念のため、一度、記憶焼却薬を打つて、記憶を奪つてある。あのことを

忘れさせてあるのだ。だが、まだその効果を試していないから、忘れていないとして処刑するつもりだったのだ」

「ふん、お前というやつは……。ところで、ケン。なぜ、ぼくを探していたんだ。このこととふたりを拉致したことと関係があるのか。そして『諦めずに、なにかがあると思つた』のはなぜだ」

「耀がまえに戻り、同じ質問を繰り返す。」

「お前を探していたのは……」

あ の とき、地区代表がなぜさらに追及することを止め、いとも簡単に諦めてしまったのか。それまでの執着振りから見ても、彼には不思議に思えて仕方がなかったのだ。とにかく、急な方向転換に、言われない違和感があつた。その違和感が彼にふたりの拉致計画を思い付かせたのだった。

一方で、彼は一軒家の出来事が気になつていた。一瞬だったが、一軒家に男が現れてすぐ消えたことがあつた。

その男を探していたのだ。その男こそ、彼が諦めずに、なにかあると思つた原因だつた。彼は拉致した女のもとに、男の現れるのを待った。

「それで……」

「だがいつまでたつても、なにも起らなかった。そこでふたりにさらに強力な発信機を埋め込んで釈放することにしたのだ」

「なんだと……」

「いままでの弱すぎるからだ。大海の大海原を彷徨う連中にはね」

「バカ言え。そうまでして……。なぜ、男の子が気になつたんだ」

「なぜ……。それは地区代表が示した異常な関心のせいだ……」

だが代表のあれまでの異常な関心が、その子の死亡が分かると、なぜ急速に凋んでしまったのだろうか。いま思い返しても、彼には代表の態度の

急変が不自然に思えて仕方がないのだ。

突然、これまでの執拗な態度を変えることができるのは、あのことが代表自身の問題ではなかったということなのだろうか。だとすると、執念じみた女の情報や子の写真の要求は上からの指示によるものだったのか。

あの女の情報や子の写真がなんのために必要だったのだろうか。彼は一度、地区代表に確かめてみたい気がしてならなかった。

「そして……」

「そうだ。俺はなぜか、お前がその女が産んだ子のような気がしたのだ。この思い付きが女に目を向けることになった。そして、俺にふたりを拉致させることになったのだ。女をそのまま建物に放置しておいたのも、そのことを確かめるためだった」

「分かん。お前さんはなにかを隠している。それなら、なぜ、ふたりを処刑しようとしたのだ。地下構造の秘密がそれほどのものとは思えないが……」

「まあ、ひとつは、処刑と見せかけて、お前を誘き出し、お前の写真を撮ろうとしたのだ。最後の賭けだった。だがその後のことは、お前も知っている通りだ」

「じゃ、なぜ、その写真も撮らずに、車もろともふたりを湖に沈めようとしたのだ」

耀の追及はつづく。

「お前を見て、女との歳が近すぎているようで、女の子じゃないかもしれないと思うようになった。このことと地下の秘密を知ったこともあって、この際、ふたりの内緒の拉致をも葬ってしまういい機会だと思ったわけだ。だがお前の邪魔が入った」

「ケン、なんという男だ。人で無しだ」

「なんとも言え。俺は正直に話した。今度はお前の番だ」

「お前さんはまだなにかを隠しているし、『黒』の話は聞いていない。まだ隠していることはなんだ、そしてどうして『黒』になったのだ」

「それはお前の話を聞いてからだ。さあ、話せ……」

彼は微かな後悔に似た思いに囚われながら、この男になぜ自分がこうもべらべら喋ってしまったのかと思つた。と同時に、断わりもなく居座りつづけている男に、なぜか、なにやらわけの分からない親しみにも似た思いが心の底からふつふつと湧いてきているのを感じていた。

4 3

「あの女は本当にお前の母親なのか……」

「ケン、何度言えば、いいんだ」

耀はむかつとして、山城の心臓を突つづく。

「止せ。じゃ、本当なんだな。だが歳が近すぎるんじゃないか。お前、一体、何歳なんだよ」

「何歳かなあ、いまは……。いまのぼくには、歳はないといったほうがいいのかもしれない」

「何だつて……」

「歳は自在に決まるのだ。そのとき用いる『術』次第にね」

「なんで。分かん。お前は生きていいのか、それとも死んでしまったのか」

「ケンのいる世界では、ぼくは死んだことになっている」

「おい、脅すなよ。死んだというお前が、どうして俺のなかに居座って、べらべら喋っているんだ。いい加減にしろ……」

「ケンには理解できないだろうが、ぼくはまだ生きてるんだよ……、ぼくはいま『天』の世界で生きてるといえばいいのだろうか」

「なんだと。お前の言うことは支離滅裂だ。生きているのか、死んでしまったのか、どっちなんだ」

「そう、はっきり区別できないな。なんでも二元論的に考えようとすることは間違っている。世の中には曖昧なことがまんとある。死んでいるといえど死んでいるようだし、生きているといえど生きているようなものだ。ここにいるぼくがいまのぼくだということなんだ」

「……………」

山城は口を固く閉じたまま、しばらくじっとして動かない。

「ぼくは死にかけていたとき、助けられて『天』の世界へ連れていかれたんだ」

「半死半生の状態のときに助けられたというのか。一体、なんの目的で、誰がお前を助けたのか……」

「『天』のひとが助けたのだ」

「分かん。そのとき、お前は何歳だったのだ」

「死んだときは、五歳だったらしいが……」

「お前は死んだのは五歳だったというのか。そしていまお前は何歳なんだ」

「何歳か分からない。歳はないのだ。いまは自在に歳はとるし、それに応じて身体も変化するのだ」

「どういうことだ。お前は半死半生の状態から、救われて『天』とやらの

世界の住人になったというのか」

「『天の組織』のメンバーの一員になったのだ」

「分かったよ。それでその『天』の世界に入ってから何年経つのだ、お前は……」

「そんなに経っていない。一年か、あるいは二年だろう。もしかしたら、もっと短いかもしれない」

「すると、お前があの子であるということは本当か。それにしても……」

「なんだ。まだ腑に落ちないのか。疑い深いやつだ」

彼には分かっていた。山城がなにを考えているのか、はっきり分かっていたが、あえて気付かない振りをしていた。彼はこころのなかで、山城にとことん付き合っていくと決めていたのだ。

そして実は、こうして彼は山城と身もこころもさらに強く一体化して、つぎのステップへ進むことを考えていたのだ。

4 4

「ハクリ、ふたりはどこへ行ったのかしら……」

未佐はハクリを振り返る。木実子と別れた湖畔にはふたりの姿はおろか、停めてあった車も見当たらない。彼女はハクリと手分けして辺りを探すが、ふたりがどこへ行ったのか、その手掛かりさえ掴めなかった。

さらに不思議なことに、駐車していた付近には車が移動したときの車輪の痕跡が全然ないのだ。

「ふたたび『黒』に拉致されたのかしら……。ヘリがやって来て、車ごと

連れ去ったんじゃないでしょうね」

「ふむ……」

「もしかしたら、車ごとふたりが湖に沈められたのかも……」

「まさか。いくらなんでも、真つ昼間にそんなことするかな。それにヨウが一体同化している以上、あの男がふたりを再度拉致したり、湖に車ごと沈めるようなことはしないとと思うが……。いや、できやしないはずだ」

ハクリは頭を傾げる。

「耀ちゃんを追いかけて、ふたたび『黒』の施設へ行つたんじゃないでしょうね。思い立ったら直ぐ行動に移すひとだから、そうしかねないわ……」

彼女はつぎつぎと思いついたことを言う。

「でも、車輪の……」

「あ、これは車輪の跡じゃないかしら」

再度地面を舐めるように身を低く屈め、車が駐車してあったところを丹念に調べていた彼女がなにか見付けたらしく、突然声を上げる。

「え、そうかなあ……」

ハクリは半信半疑だ。

「一度『黒』の施設を見てみましょうよ」

「ミサがそう言うなら、一度、あの付近を見て回るか」

根負けしたのか、ハクリは宙に舞い上がり、翔け出す。彼女は後を追う。

「あそこだったかな……」

ハクリは指差す。

建物は深い森の中に埋もれている。注意しないと、見落として上空を通り過ぎてしまいそうだった。

ハクリは屋根に降り、屋根の上から周りを見渡す。どこにもふたりを乗

せた車はなかった。

辺りを見回しながら、ハクリは煙突に近寄ると、彼女を手招きする。ふたりは煙突からなかを覗き、建物の内部へ入っていく。

建物のなかは深閑として、ひとの気配はない。

「ここにはふたりは来ていないわね。ハクリ、他を探しましょうか……」

彼女は煙突から外へ出ると、ハクリを促し、空に舞い上がる。

他に探す当てはなかった。だが彼女はなにか得体のしれないものが襲つ

てくるような予感がして、建物のなかにじつとしているわけにはいかなかったのだ。

彼女は上空に留まって、ハクリを待った。ハクリは疲れたのか、妙にのろのろとゆっくり上ってくる。

ふと、建物の方へ目を移すと、建物は姿を消していた。建物全体は森の中に吸い込まれたのか、それとも地中へ沈んでしまったのか、一面樹木に覆われていた。

ふたりはどこへ行ったのだろうか。「黒の組織」に対し、協働して闘つつもりでいたのに、それを嫌ってふたりは逃げ出したのだろうか。

彼女は自分のまえから、忽然と姿を消してしまったふたりを思い、なんともやるせなかつた。

耀も遠くへ行ってしまった。耀さえもいなくなつたいま、彼女は一人ぼっちになつてしまったようで心細かつた。

「これから、わたしはどうすればいいの」

彼女は途方に暮れて、ひたすら宙を漂いつづけていた。不意に、彼女の目の前にハクリが現れた。

「ミサ、分かつたぞ。ふたりは多分発信機を……」

その瞬間、彼女の脳裏に微笑んでいる耀の顔が浮かんだ。

(第三巻 完)

天翔け地這う 第三巻 オセロ作戦1

生野以久男

二〇一二年一月二〇日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2012

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

この物語はフィクションです。登場する国や団体、組織、個人等は実在するものとなんら関係はありません。

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし